

令和4(2022)年度

研究のまとめ

深い学びにつなげるために
～対話的な学びを通して～



大阪市立東井高野小学校

は じ め に

新しい学習指導要領全面実施3年目が終わろうとしています。学習指導要領で「一人ひとりの児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り抜き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている」と示されています。

また、大阪府教育振興基本計画は令和4年度より基本理念を「すべての子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力を備え、健やかに成長し、自立した個人として自己を確立することをめざします。あわせて、グローバル化が進展した世界において、多様な人々と協働しながら持続可能な社会を創造し、その担い手となることをめざします。」とし、以下の3つの最重要目標を定めています。

1. 安全・安心な教育の推進
2. 未来を切り拓く学力・体力の向上
3. 学びを支える教育環境の充実

令和2年度までは、算数科で「共に学び、ともに高め合う子どもを育てる」をテーマとし授業改善に努めました。

令和3年度から研究教科を国語科とし、昨年度は、

主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる
～説明的な文章を読み取る力の育成を通して～

今年度は

深い学びにつなげるために
～対話的な学びを通して～

を研究主題とし、研究の視点として以下の3点としました。

- ①確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫
- ②対話的なルールづくりの工夫
- ③深い学びにつなげるための振り返りの工夫

本校は、全国学力・学習状況調査や大阪府新学力テスト、大阪市小学校学力経年調査から「主体的対話的で深い学び」を実現するための学力向上が喫緊の課題です。全ての教科の根源となる国語科の授業研究・討議を深め、さらに、「大阪市子ども読書活動推進計画」との整合性も図り、教職員の力を結集し、大阪府教育振興基本計画の基本理念が達成できるよう研究に邁進する所存です。

令和5年3月

大阪市立東井高野小学校
校長 木村 憲 次

目次

はじめに

I. 研究の概要

1. 研究主題	1
2. 研究主題設定の理由	1
3. 研究の視点	2
4. 研究の組織	3
5. 研究の計画	4

II. 各学年の取り組み

1. 第1学年	6
「サラダでげんき」	
2. 第2学年	12
「ニャーゴ」	
3. 第3学年	18
「人をつつむかたち」	
4. 第4学年	26
「世界一美しいぼくの村」	
5. 第5学年	34
「弱いロボットだからできること」	
6. 第6学年	42
「海のいのち」	
7. なかよし(特別支援学級)	50
「なあにかな？」	

III. 研究のまとめ

1. 研究の成果	55
2. 今後の課題	55

おわりに

I 研究の概要

I. 研究主題

深い学びにつなげるために
～対話的な学びを通して～

2. 主題設定の理由

本校では、昨年度より国語科を研究教科として実践を進めている。昨年度は、「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる」と主題を設定し、説明的な文章を読み取る学習を中心に対話的な活動を取り入れた研究に取り組んだ。その結果、要旨のとらえ方や要約の仕方が身につく、対話的な学びに積極的に取り組もうとする児童の姿が見られた。しかし、次のような課題もみられた。

- ・ 同じ流れの学習が続く、授業がマンネリ化してきている。
- ・ 授業全体の時間配分がうまくいかず、対話的な学習活動にける時間が少ない。

そこで今年度は、一昨年まで実践を積み重ねてきた算数科の研究と同じように授業のスリム化を図り、「ひとり→ひとと→みんな」という対話的な学びに研究の焦点を当てる。

本校の児童は、課題に対して考えや意見をもっている。しかし、それが正しいのかを懸念し、発表をしたり文章に書き表したりすることに躊躇する傾向がある。またそこには、児童の自己肯定感の低さや、「書く」ことへの苦手意識なども伺える。よってまずは、対話的な学びを通して児童一人ひとりの自己評価を高めることが不可欠であると考え。発達段階に応じた「ひとと」「みんな」といった対話的な学びを取り入れた学習活動を行う。その中で、自分の考えが伝わった喜びや対話の中での発見と言った経験を重ね、自己肯定感の向上を促すための目的をもった振り返りを行う。そしてその経験や自己肯定感の高まりが深い学びにつながり、確かな学力への足掛かりになると考える。そのために今年度は以下の視点をもって研究を進めていく。

3. 研究の視点

① 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

「めあて」→「まとめ」までを、時間的な余裕を持って取り組むための授業のスリム化を目指すための工夫。→全時、指導計画の要点を明確に抑える必要がある。

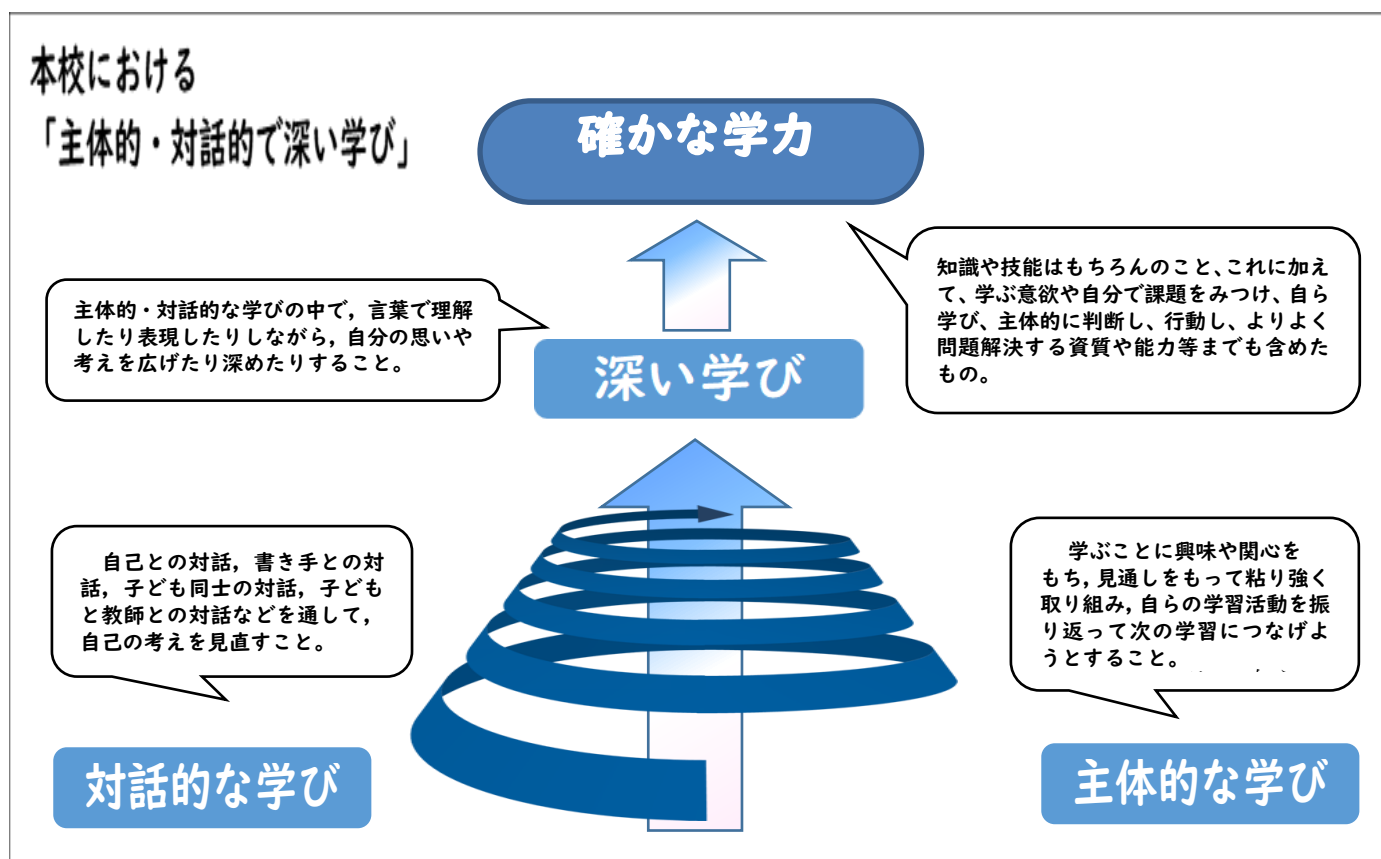
② 対話的なルールづくりの工夫

各学年、指導要領に基づいた学年の目指すめあてに沿ったルール作りに取り組む。またそのための発問や課題提示の工夫を行う。→机間指導のめあてを明確にする必要がある。

② 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

児童が本時で「どのような力が身についたのか」をひとり→ペアまたは全体で振り返らせる時間を定着させる。そのための手段（板書、ワークシート、発表の仕方など）の工夫を行う。→単元全体で段階的にどんな力を児童につけるのかを明確にする必要がある。

○研究の視点にせまるために



● “対話へのアプローチ

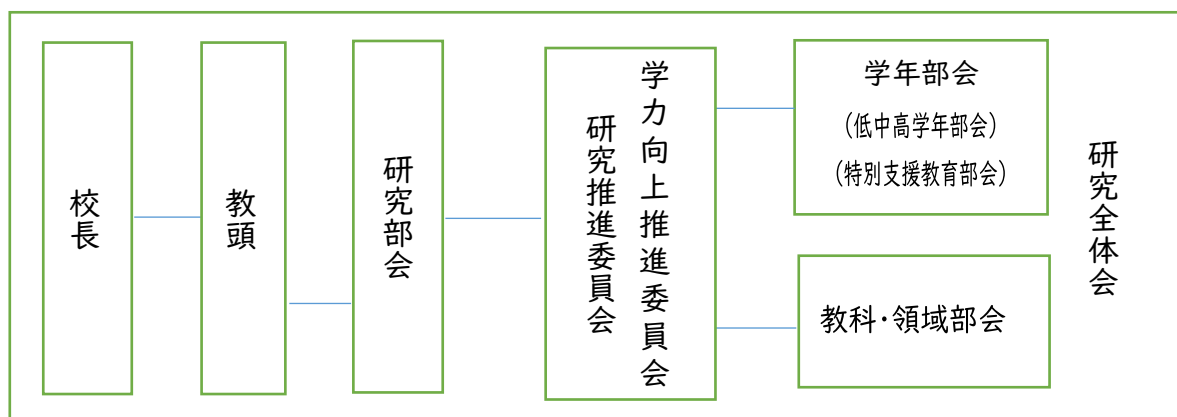
“対話”はあくまでも「深い学び」や「確かな学力」へ到達するためのツールである。つまり教師は、児童に“対話”を通して1年間でどのような力をつけたいのかを明確にもつ必要がある。そして児童一人ひとりが対話を通した学習活動で“伝わった”や“もっとこうすればよかった”など具体的な振り返りをすることが“対話”に深まりを持たせる。さらに“小さなできた”の積み重ねが児童の自己肯定感の高まりにもつながる。そのためには、児童の実態や学力の状況にあわせ、各単元でどのような対話を活用するとよいのかを考えていく必要がある。1年間、目的のある対話と振り返りを積み重ねることが「深い学び」につながる。

● 「書くこと」へのアプローチ

日頃から、小さな出来事や身近なテーマを文章で表現する機会を作る。その文章を全体で共有することにより、何を書けばよいのかわからない児童も書き方がわかってくる。また、その時の様子がわかる言葉や、気持ちを表現している言葉を一緒に振り替えることは児童の語彙力につながる。語彙力は表現力につながり、文章の全体共有を繰り返す中で少しずつ「書くこと」に対する自信が深まってゆく。ほかに、たくさんの物語や説明文の一部の試写は、「読む」ことへの興味を引き出すことにもつながる。さらに短時間でたくさんの文字を書く練習にもなる。

今年度はまず「書くこと」へのハードルを下げ一年とし来年度にさらに深めてゆきたいと考える。

4.研究の組織



組織	メンバー	活動内容
研究推進委員会	学校長 教頭 教務主任 研究部長 各学年代表者	・研究主題の設定 ・研究内容の検討 ・各部会との連携 ・研究紀要作成の計画、運営
学力向上推進委員会	学校長 教頭 教務主任 学力向上推進担当 各学年代表者	・学力向上の推進計画、運営 ・モジュール学習の推進 ・カリキュラムマネジメントの推進 ・メンター研修の計画、推進
研究全体会	全教職員	・研究計画、方針等の協議、共通理解 ・研究授業と研究討議会 ・研究の成果と課題についての協議、共通理解
学年部会 (低中高学年部会)	全教職員	・学習指導の構想 ・資料や教具の作成 ・学習指導案の作成 ・学年部研究授業と研究討議会
教科・領域部会	各教科・領域主任	・教材や教具の整備と充実

5.研究の計画

	研究内容	その他	
4	研究推進委員会 「研究組織の編成」・「研究主題・計画の検討」 「研究計画の立案」	特別支援教育研修会 メンター研修①	
5 ・ 6	研究推進全体会 「研究主題・計画の決定」・「研究推進についての 共通理解」・「研究授業・討議会の役割分担」 国語科全体研修会①	人権教育講演会 学力向上推進委員会 特別支援教育研修会 OJT 研修 学力向上効果検証授 業	
7	国語科授業実践研修		
8			
9 ・ 10	国語科全体研修会② 研究推進委員会 「6年生 指導案検討会」 6年生 研究授業「海のいのち」・討議会・研修会	総合的読解力育成研 修会	
11	研究推進委員会 「2年生 指導案検討会」 低学年部会授業研究 1年生「サラダでげんき」 2年生 研究授業「ニャーゴ」・討議会・研修会	道徳科授業実践・研修 会 OJT 研修 学力向上効果検証授 業	
12	研究推進委員会 「4年生 指導案検討会」 国語科授業実践研修		
1	4年生 研究授業「世界一美しいぼくの村」・討議 会・研修会 中学年部会 授業研究 3年生「人をつつむ形」	区教員研究発表会	
2	高学年部会 授業研究 5年生「弱いロボットだから できること」	アセス伝達講習会 学力向上効果検証授 業	
3	学年部研究授業 特別支援学級「なあにかな？」 研究推進全体会 「今年度の課題と成果」・次年度の研究内容についての 共通理解」	学力向上推進委員会 人権教育実践報告会	

Ⅱ. 各学年の取り組み

1. 第1学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

「サラダで元気」

2. 第2学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

「ニャーゴ」

3. 第3学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

「人をつつむ形」

4. 第4学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

「世界一美しいぼくの村」

5. 第5学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

「弱いロボットだからできること」

6. 第6学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

「海のいのち」

7. 支援学級・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

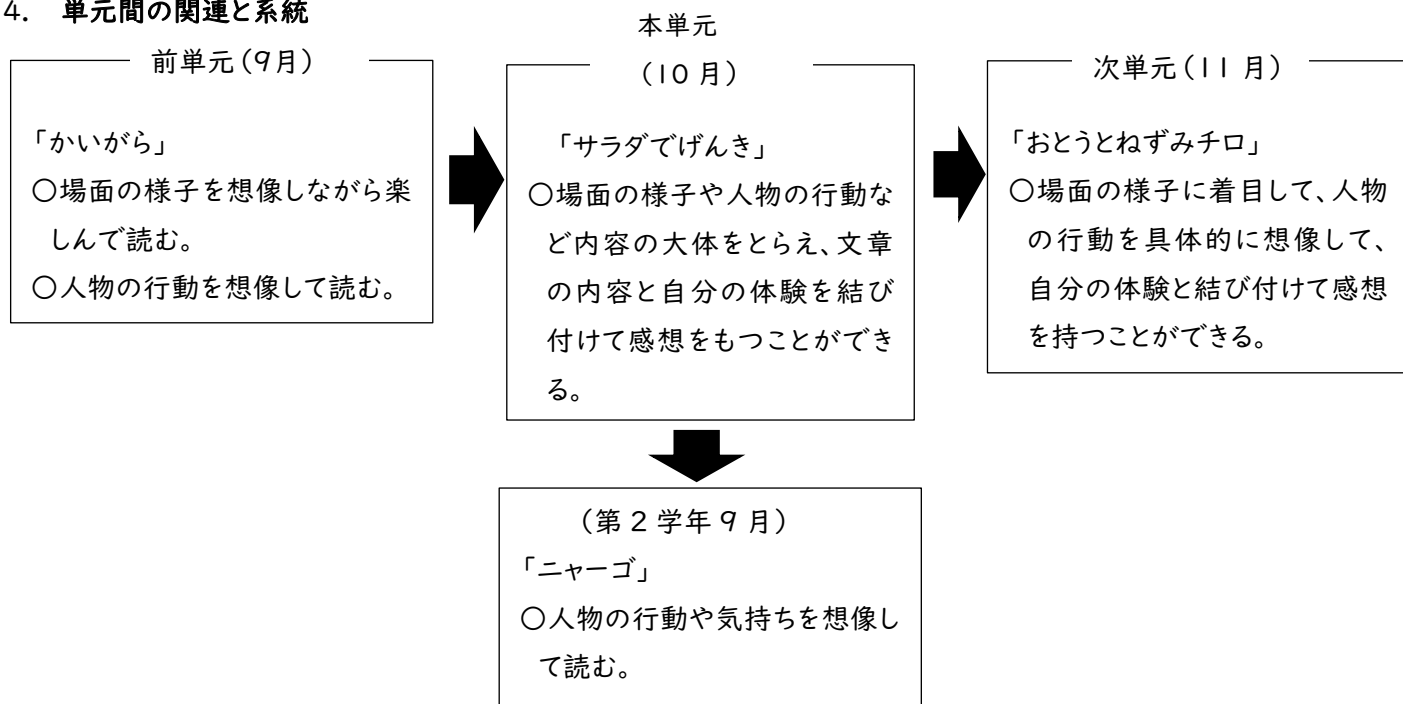
「なあにかな？」

第一学年

国語科学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○ ○○

1. 日 時 令和4年10月12日(水) 第2時限(9:55~10:40)
2. 学年・組 第1学年1組 在籍25名(教室)
3. 単元名 おはなしをよもう「サラダでげんき」(東京書籍 1年下)
4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

- 場面の様子や人物の行動など内容の大体をとらえ、文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもつことができる。
- ・ 事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。
- ・ 場面の様子や登場人物の会話や行動などに着目し、内容の大体をとらえている。
- ・ 文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもつことができる。

6. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。…(2)ア	・場面の様子や人物の行動など、内容の大体を捉えている。…C(1)イ ・文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもつことができる。…C(1)オ	・語と語や文と文との続き方に注意している。…B(1)ウ	・これまでの学習で気付いたことやできるようになったことを生かして見通しをもち、場面の様子や登場人物行動など、内容の大体を捉えて、感想を伝え合おうとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

これまでに、児童は「あめですよ」(6月)、「おおきなかぶ」(7月)、「かいがら」(9月)の学習をしている。「あめですよ」では、挿絵と叙述を結び付けて登場人物の気持ちを想像させ、声の調子や体の動きで表現する学習を行った。「おおきなかぶ」では、繰り返しのおもしろさに気づかせ、登場人物の様子や繰り返しの度に高まるおじいさんの気持ちを想像して、音読で表現する学習を行った。「かいがら」では、くまの子の行動や気持ちを想像させて、登場人物の気持ちに同化しながらお話を読むことの楽しさを味わう学習を行った。最後の場面でくまの子やうさぎの子の気持ちを想像して書く学習をしたが、書くことができた児童はほとんどいなかった。残りの児童も、文中に書かれていないことを想像することは難しいようで、叙述にある気持ちをそのまま書いていた。登場人物になりきって物語を読み、気持ちを想像して文章にすることが難しかった。

(2) 単元観

本単元は、サラダが完成するまでの過程に沿って、場面ごとに登場人物が行動を起こす構成となっている。お母さんのためにサラダを作ろうとするりっちゃんの前に、動物たちが次々と出てきて、サラダに入れるとよい材料とその効果を教えるというお話である。動物たちの登場は、同じような構成の場面が繰り返されることで、「誰が」「何をした」かが読み取りやすい内容になっている。その表現には共通する点が多く、順序や様子のちがいがとらえやすい。

児童と同年代と思われる中心人物「りっちゃん」が病気の母のために何かしてあげたいと考え、おいしくて元気になるサラダを作ろうとを思いつく。そして、動物たちのアドバイスを素直に聞き入れて、よりよいサラダにしようとする「りっちゃん」の気持ちに同化させながら読ませていきたい。また、動物たちのアドバイスにはそれぞれ個性が表れている。なぜそのようなアドバイスをしたのか、なぜアフリカゾウは最後の仕上げを「ぼくのしごと」と言っているのかなど、それぞれの動物について知っていることをもとにして想像して考えさせ、次第に「りっちゃん」の作りたかった「おいしいサラダ」「げんきになるサラダ」となっていく様子を読み深めさせたい。

(3) 指導観

第1次では、全文を通読して、大まかな話の内容をつかむ。りっちゃんがサラダを作ろうとした理由と、どのようなサラダを作ろうとしているのかを確かめる。そして、次々と動物たちが登場し、りっちゃんにサラダに入れる「材料」と「その効果」を教える繰り返しのおもしろさにも気づかせながら指導していく。意欲的に文章全体の展開を読み取り、登場人物の会話や行動に着目して想像を広げながら読むことができるように、音読も工夫をしながら指導する。

第2次では、話の展開を叙述に即して捉えさせるために、「材料」(本時では「味付け」)と「その効果」に線を引かせる。これにより、繰り返しの構造を捉えやすくなったり、動物たちが登場するたびにサラダが完成に近づく展開を読み取ったりすることができると考える。また、「場面」という用語を伝え、登場する動物ごとに場面が分けられることを押さえる。そして、動物たちが教えた「サラダに入れるとよいもの(材料)」と「食べるとどうなるのか(効果)」に表にまとめ、それぞれの動物との関連をわかりやすくする。

第3次では、児童自身が本教材に登場する場面をつくり、「サラダで もっとげんき」というお話にするという活動を設定する。病気のお母さんのために何かしてあげたいという児童と同年代と思われるりっちゃんの想いは、どの児童にも共感でき、受け入れやすい。そこで、読み取ったことをもとに、りっちゃんが作ろうとしているサラダに、自分ならどのような「材料」を薦めて、どのような「効果」があるのかを考える。自分が考えた「材料」や「効果」はペアやグループで話し合わせてから、「サラダで もっとげんき」というお話作りに取り組む。できたお話は読み合い、感想を伝え合うとともに、単元の学びを振り返らせる。

8. 学習指導計画(全 10 時間)

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1 2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の見通しを立てる。 ○ 全文を通読をして、大まかな話の内容をつかむ。 ○ りっちゃんがサラダを作ろうとした理由と、どのようなサラダを作ろうとしているのかを確認める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「りっちゃんは何をしたか」「最後はどうなったか」などを問いかけて、登場する動物と内容の大体をとらえさせる。
II	3 4 5(本時)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 物語の中で起こった出来事を確認める。 ・p. 8～16 を読み、どんな動物が、どのような順序で出てきたかを確認める。 ・「場面」という用語を知り、動物ごとに場面を分ける。 ○ 動物たちが教えた「サラダに入れるとよいもの(材料)」と「食べるとどうなるのか(効果)」について考える。 ・のらねこ ・となりの犬 ・すずめ ・あり ・うま ・白くま ・アフリカゾウ ○ アフリカゾウが、りっちゃんのためにしたことについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物たちが教えた「サラダに入れるとよいもの(材料)」と「食べるとどうなるのか(効果)」に線を引かせ、出てきた順序を確認めさせる。 ・動物たちが教えた「サラダに入れるとよいもの(材料)」と「食べるとどうなるのか(効果)」は表にまとめ、それぞれの動物との関連をわかりやすくする。 ・ほかの動物との違いを考えさせながら、アフリカゾウがりっちゃんのためにしたことを考えさせる。
	6 7・8	<ul style="list-style-type: none"> ○ できあがったサラダを食べたお母さんの様子を想像する。 ○ 動物たちと同じように、自分が登場するお話を考える。 ・「サラダで もっとげんき」 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初と最後の場面の挿絵を比べて、サラダを食べた後の元気な様子をとらえさせる。 ・これまで動物たちが教えたことをもとに、自分だったらどのような材料を入れて、どのような効果があるのかを考えさせる。
III	9・10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分が登場する場面を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・考えたお話を発表し、感想を伝え合う。

9. 本時の学習(5/10時)

(1) 目標

アフリカゾウと他の動物との役割の違いや共通点について読み取ることができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 本時のめあてを確認する。	・前時までの学習を振り返り、動物たちがりっちゃんに教えたことを表で確かめさせる。 ・本時の課題を提示し、ノートに書かせる。	一斉 個人	
	めあて アフリカゾウが、りっちゃんのためにしたことをかんがえる。			
精査・解釈	2. アフリカゾウがしたことについて考える。 3. 音読する。	・これまでの動物たちがりっちゃんに教えたことやサラダができあがっていることを確かめさせる。 ・アフリカゾウがしたことにつけて、一斉音読させたり、指名音読させたりする。	一斉	
考えの形成	4. 自分の考えや意見を発表する。 5. 考えを深める。	・個人の意見を述べやすくするために、ペアで対話する場を設定する。 ・ほかの動物との違いを考えさせながら、アフリカゾウがりっちゃんのためにしたことを考えさせる。	ペア 一斉	・アフリカゾウがしたことについて読み取ることができるか。
共有	6. 振り返りをする	・新たに知ったこと、気づいたことを発表することで振り返りをする。	一斉	

10. 板書計画

サ ラ ダ で げ ん き か ど の え い こ	ア フ リ カ ぞ う が 、 り っ ち ゃ ん の た め に し た こ と を か ん が え る。 ど う ぶ つ た ち が お し え て く れ た こ と ・ の ら ね こ か つ お ぶ し ・ と な り の 犬 ハ ム ・ す ず め と う も ろ こ し ・ あ り さ と う ・ う ま に ん じ ん ・ 白 く ま こ ん ぶ ア フ リ カ ぞ う が し た こ と ・ あ ぶ ら と し お と す (ド レ ッ シ ン グ) ・ カ づ よ く ま ぜ た	ま と め ・ 振 り 返 り
---	--	--------------------------------------

11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

前時までの学習を掲示物等で振り返り、本時の学習課題を導入の早い段階で明確にとらえさせることで、話し合い活動や意見の交流など考えを深める時間を確保することができていたか。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

ペアや少人数のグループ内で対話的な話し合い活動を通して、自分の意見を発表することができたか。また、友だちの考えを聞いて自分の考えを深めることができたか。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

本時のめあてに沿った振り返りができていたか

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

「読む」「書く」「発表する」といったそれぞれの活動時間を配分し、学習効果を最大限に高める工夫が必要となる。また、本時のめあてを明確にして、授業を展開していくことが大切であると考えた。

ひらがな・カタカナといった文字を一通り学習し終えたばかりの1年生にとって、板書をノートに写すだけでも相当な時間が必要となる。そのため、どの子にも本時の学習内容や学習のゴールがイメージしやすいめあてや課題を設定することにした。また、学習を振り返る際に実際に前時まで使用した掲示物等を活用することで、本時の学習課題を導入の早い段階で明確にとらえさせるような工夫をした。

これらの工夫で、ペアによる話し合い活動やクラス内で意見を交流する時間を確保することで、考えを深める時間を確保することができた。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

ペアや少人数のグループ内で対話的な話し合い活動を通して、自分の意見を発表しあう。また、友だちの考えを聞いて、自分の考えを深める。

話し合いの前には、話し合いの目的を明確にして、意識させることで対話的な学びの質を高めることができた。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

時間配分で振り返りの時間を確保し、意見を交流する時間を設定した。意見の交流によって、自分の考えに自信を持ち、友達の考え方に気づき考えを深めることができる。ペアによる話し合い活動が意見交流する前の気づきとなり、自分の考えを広め、深めることができる。

13. 成果と課題

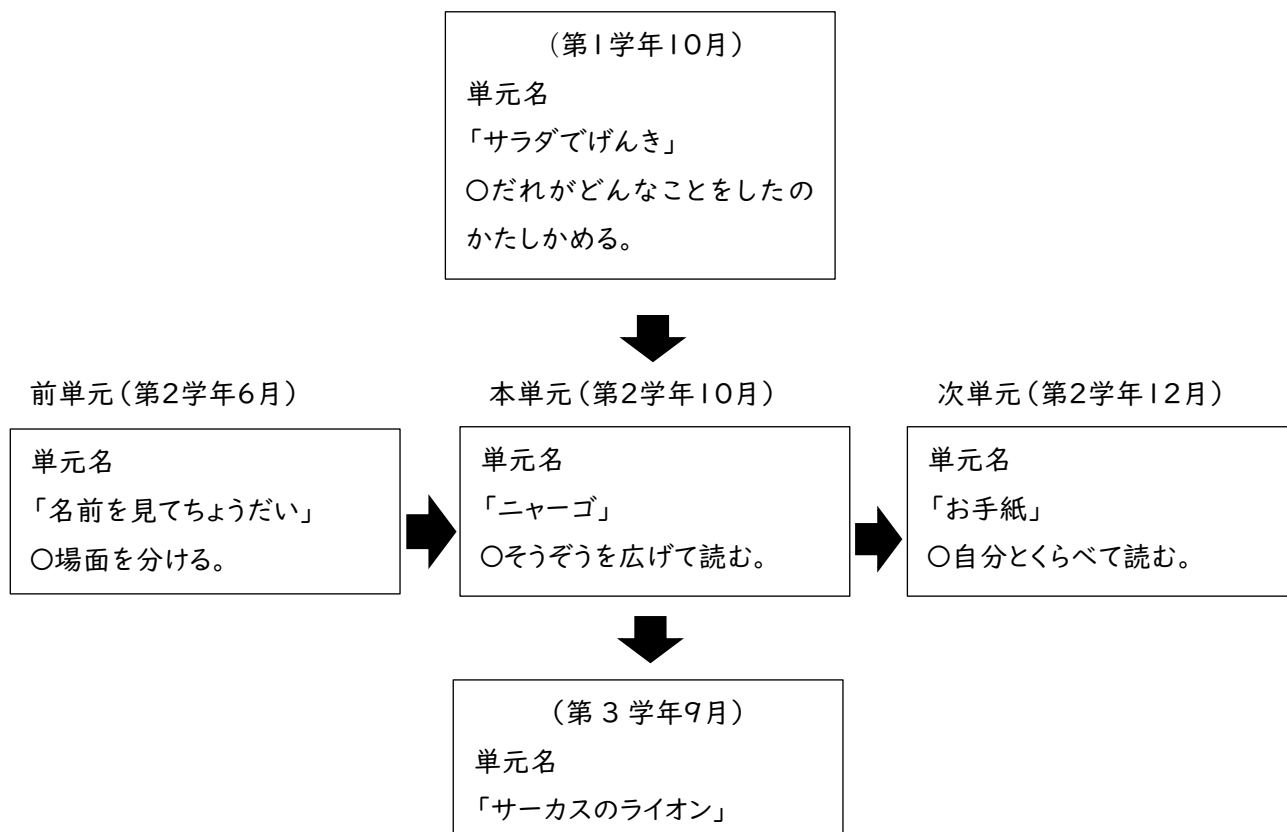
- 本時のめあてを明確にして、時間配分の工夫して授業を展開していくことで、話し合い活動や意見を交流する時間を確保でき、自分の考えを深めることができた。
- 話し合いをする前には、話し合いの目的を明確にし、考えを深めることを意識させる。目的を明確にした話し合い活動を効果的に取り入れることで、対話的な学びの質を高めることができた。
- 振り返りの時間を確保し、意見を交流する時間を設定しておくことで、自分の考えを広め、深めることができた。
- アフリカぞうがしたこと＝仕上げにサラダをかきまぜた場面に動作化を取り入れることで、本文の表記を体感させ、さらに読み取りを深めることにつながった。
- 教科書の挿し絵を活用していく。教科書には本文をイメージさせ理解に結び付くような、効果的な挿絵が要所要所に掲載されている。その挿し絵に吹き出しをつけることで、登場人物になりきり、素直な気持ちを書くことにつなげることができた。
- ノートに書き写す経験が少ない1年生の子どもたちには、教師から声に出して複数回読むことで記述する時間が短縮につながると考える。

第二学年

国語科学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○ ○○

7. 日 時 令和4年10月19日(水) 第5時限(13:50~14:35)
8. 学年・組 2年2組 (教室)
9. 単 元 名 「気持ちを音読であらわそう」(「ニャーゴ」東京書籍 2年上)
10. 単元の関連と系統



5. 学習目標

- 人物の行動や気持ちを具体的に想像し、想像したことを音読で表すことができる。
- ・語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読している。(知識・技能)
- ・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。(思考・判断・表現)

6. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読している。…(1)ク	・登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えている。…C(1)イ ◎登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。…C(1)エ	・経験したことや想像したことなどから書くことを見つけ、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にしている。…B(1)ア	・これまでに学習したことを振り返って学習活動を明確にし、これまでの学習を生かして、物語の内容の大体を捉え、人物の行動や気持ちを具体的に想像し、想像したことを音読で表そうとしている。

7. 指導にあたって

(児童観)

児童は、二年上「名前を見てちょうだい」の学習で、場面の様子に着目し、登場人物の行動を具体的に想像しながら読むことを学んできている。場面ごとに登場人物の気持ちを考えて吹き出しに書く活動を継続して行ってきた。はじめは、気持ちを想像して書くことに苦手意識のある児童がいた。そこで、ペア学習を多く取り入れながら学習を進めてきた。友だちの意見を聞くことで、何を書けばいいのかをイメージしやすくなり、少しずつ自分の考えを書き表すことができるようになってきた。しかし、本文中の叙述を基にして様子や心情を捉えることについては、手掛かりとなる言葉を見つけれない児童も多く、課題であると考え。

音読においては、声の大きさや抑揚、読むスピードを考えて読むことを経験している。また、「点や丸に気をつけて読む」ことも徐々に定着しつつある。物語の学習を重ねるごとに、登場人物になりきって読むことを楽しむ児童が増えてきた。

(教材観)

本単元の重点指導事項は、学習指導要領における【思考力、判断力、表現力等】の「読むこと」(C(1)エ)「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」である。本単元では、登場人物の気持ちを想像し、想像したことを音読で表現するという言語活動を設定している。そして、場面の様子や人物の行動を具体的に想像する力や、読んで感じた自分の思いや考えを表す力を養うことを目指している。

本教材は、人物の設定に特徴がある。猫とねずみは、ふつう「食う―食われる」の関係にある。だから、猫が鳴くと、子ねずみは食べられることを恐れて逃げ出すはずであった。しかし、先生の話聞いていなかった子ねずみたちは猫の怖さを知らず、無邪気で、親切に猫と接していく。子ねずみを食べるはずだった猫も、子ねずみの無邪気さと優しさに触れながら、徐々に心を動かされていく。両者の心の変化の中で、猫と子ねずみたちの関係も変わっていくというところに人物設定の特徴がある。

本教材は、会話文や心内語が多く、想像した人物の気持ちを音読で表すことにも適している。この物語は、「ニャーゴ」という言葉に込められた猫の思いと、それに対する子ねずみたちの解釈のズレが面白さを生んでいる。文中には、題名でもある「ニャーゴ」という言葉が、何度も文中に出てくるが、それらの意味はすべて異なっている。その違いを叙述をもとに場面を追って考えることで猫の気持ちの変化を捉えやすい。また、場面ごとに登場人物の行動や様子を読み取り、想像を広げて読む力をつけるのに適した教材である

(指導観)

第Ⅰ次では、題名でもある「ニャーゴ」という言葉に着目し、一般的な猫の鳴き方の「ニャー」との感じ方の違いについて、話し合う。「ニャー」と比べて、「ニャーゴ」からは強そうな怖そうな感じを受けることを確認し、想像が膨らむようにする。本単元の言葉の力「人物がしたことや言ったことについて、そのわけを考えること。人物の様子や気持ちについて想像が広がり、お話を楽しく読むことができる。」に着目して学習をし、想像したことをもとに、音読劇をする本単元のめあてを確認する。また、場面分けでは、「時」「場所」「人物」を手掛かりに分けられることを確認し、どこで場面を分けるとよいかを考えることで物語の大体を捉えられるようにする。

第Ⅱ次では、それぞれの場面ごとに、場面の様子や登場人物の言動に着目し、子ねずみたちや猫の様子や気持ちを比べて読むことで登場人物の関わりや場面の变化をつかませる。第1場面では、3匹の子ねずみたちは、猫の恐ろしさについて知らないということを押さえる。第2場面では、子ねずみたちの無邪気さと、それに対する猫の戸惑いの読み取り、第3場面では、猫は子ねずみたちと桃を食べながら、心の中に秘めた猫の本当のねらいを読み取らせる。第4場面に出てくる二度目の「ニャーゴ」は、三匹の子ねずみたちを食べてやるという意味表示である。しかし、その意味を誤解して無邪気に振る舞う子ねずみたちにより、猫の気持ちが徐々に変化していく山場の場面である。そこで、ポイントとなる桃のやり取りから、ため息をついた時の猫の気持ちを想像し、複雑な気持ちの変化に気づかせたい。猫の様子や言葉には赤のサイドライン、子ねずみたちの様子や言葉には青のサイドラインを引き、誰の言動なのかをはっきりさせながら確認していきたい。「誰が」「どうした」の関係を正確に捉え、これをもとに登場人物の気持ちを想像させたい。特に題名でもある「ニャーゴ」という言葉は丁寧に扱いたい。最初に子ねずみたちを見つけた猫は「ニャーゴ」という言葉にどんな思いを込めたのか。去り際の「ニャーゴ」にはどんな思いが込められているのか。動作で表現したり、ほかの言葉で置き換えたりする活動を取り入れ、登場人物の気持ちについて想像を広げられるようにしたい。また、なぜそう考えたのかを理由をつけて話し合わせることで考えを深められるようにしたい。本時では、これまでの学習で読み取ったことや、想像して

きたことを参考に、子ねずみたちを食べようとしていた猫が、最終的には食べないことに決めたわけを考えることで読みを深めていくようにする。自分の考えを書くのが苦手な児童にはヒントカードを渡し、自分の考えが書けるようにする。また、グループ活動では、①考えを伝え合う。②いいところを見つける。③考えをまとめる。の順序で話し合いを行う。考えをまとめるために、考えの伝え合いにとどまらず、友だちの考えを真剣に聞いたり、理由とともに自分の考えを伝えたり、疑問に思ったことを質問したりして、全員が考えを深められるようにしたい。

第Ⅲ次では、グループに分かれて音読劇の練習をし、発表会を行う。これまでの学習をもとに、声や表情、動きなどの表現を工夫して音読劇をするように指導する。また、聞き手を意識した発表になるよう促し、想像を広げて読む楽しさも味わわせたい。また、本教材の作者の作品を教室で自由に読めるような環境を整えることで、児童の興味や学習への意欲につなげていきたい。

8. 学習指導計画(全13時間)

次	時	学習活動	指導・支援・評価
Ⅰ	1	○単元の学習の見通しを立てる。	・教科書 P.125 を読み、題名や挿絵から想像を膨らませる。 ・「ニャーゴ」を読み、初発の感想を交流しながら、学習課題を確かめる。
	2	○物語の「時」「場所」「人物」を確かめ、物語の場面分けをする。	・場面分けをすることで物語の大体を捉えさせる。
Ⅱ	3	○第1場面を読んで、物語の中で起こった出来事確かめる。	・猫の恐ろしさを読み取らせる。 ・三匹の子ねずみたちは、先生の話の話を全く聞いておらず、猫の恐ろしさについて知らないということを押さえる。
	4	○第2場面を読んで、人物の気持ちを想像する。	・猫の恐ろしさを知らない子ねずみたちの無邪気さと、それに対する猫の戸惑いを読み取らせる。 ・一度目の「ニャーゴ」に込められた猫の思いについて想像を広げる。
	5	○第3場面を読んで、物語の中で起こった出来事確かめる。	・子ねずみたちと桃を食べながら、心の中では子ねずみたちを食べることをたくらんでいる猫の本当のねらいを押さえる。
	6	○第3場面を読んで、人物の気持ちを想像する。	・子ねずみと桃を食べているときの猫の気持ちについて想像を広げる。
	7	○第4場面を読んで、物語の中で起こった出来事確かめる。	・子ねずみたちを食べようとする猫と、無邪気にかかわる子ねずみたちの様子を読み取らせる。
	8	○第4場面を読んで、人物の気持ちを想像する。	・二度目の「ニャーゴ」に込められた猫の思いについて想像を広げる。
	9	○第5場面を読んで、物語の中で起こった出来事確かめる。	・桃を大事そうに持って帰る猫の様子を読み取らせる。
	10 本時	○猫の気持ちの変化を読み取る。	・子ねずみたちを食べるつもりでいた猫が、子ねずみたちを食べなかった気持ちの変化の理由について想像を広げる。
	11	○第5場面を読んで、人物の気持ちを想像する。	・最後の「ニャーゴ」に込められた猫の思いについて想像を広げる。
	12	○音読劇の練習をする。	・これまでの学習してきたことをもとに、グループに分かれて役割を決め、音読劇の練習をする。
Ⅲ	13	○単元の学習を振り返る。	・音読劇の発表会を行う。 ・声の大きさや動き、音読に込められた気持ちなど、友だちの発表の良いところを見つけさせる。

9. 本時の学習(10/13時)

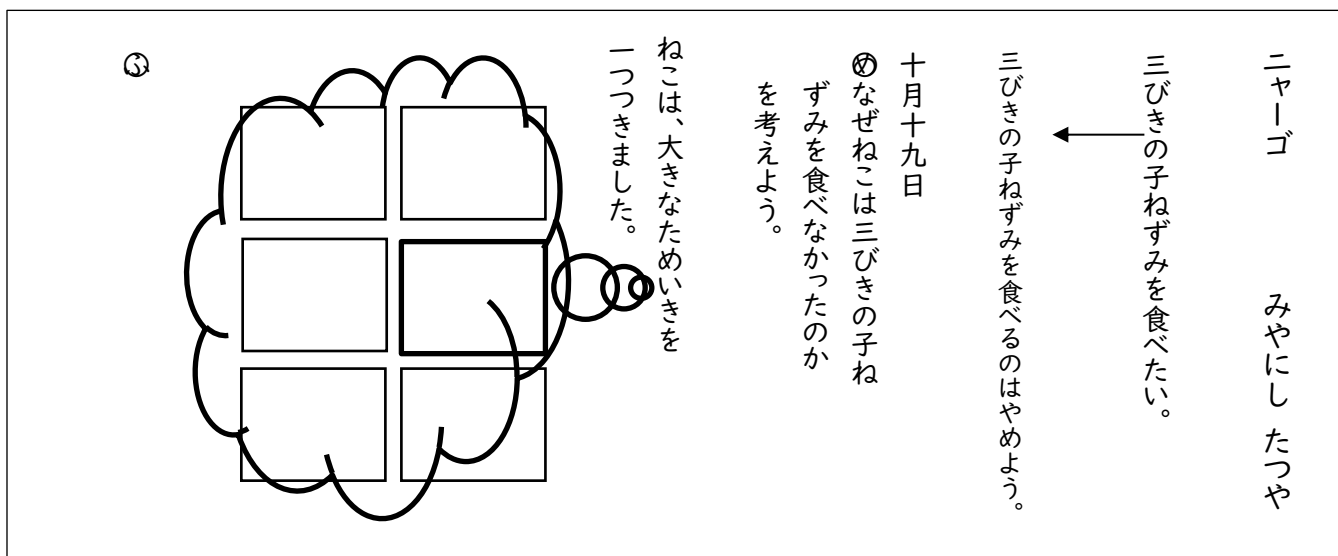
(1) 目標

・猫の気持ちの変化を読み取り、なぜ変化したのかを考え、深めることができる。

(2) 展開

学習 過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習 形態	評価
構造 と 内容 の 把握	1. 本時のめあてを確認する。	・猫の気持ちの変化を確かめる。 ・本時の課題を提示し、ノートに書かせる。	一斉 個人	
	⑥なぜねこは三びきの子ねずみを食べなかったのかを考えよう。			
精 査 ・ 解 釈	2. 気持ちが変わったことが分かる文章を確かめる。 3. 第4場面を音読する。 4. 猫がため息をついた理由を考える。	・猫の気持ちの変化が分かる文章に線を引かせる。 ・「ねこは、大きなためいきを一つつきました。」の部分をノートに視写させる。 ・猫がため息をついた理由を考えながら読むように指示する。 ・書くことに苦手意識のある児童にはヒントカードを渡す。	個人 ペア 一斉 一斉 個人	・猫がため息をついた理由を考えてノートに書くことができる。
考 え の 形 成	5. グループで考えを深める。	・考えを発表しやすい環境を設定する。 ・お互いの考えのいいところを見つけて、考えを深められるようにする。 ①考えを伝え合う。 ②いいところを見つける。 ③考えをまとめる。	グル ープ	・グループで協力して、考えを深めることができる。
共 有	6. 全体で発表する。 7. 振り返りをする。	・グループの考えを共有し、様々な考えがあることに気付かせる。 ・ワークシートを使って、めあてにそった振り返りができるようにする。	一斉 個人	

10. 板書計画



11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

明確な学習課題の設定と、学習課題にスムーズに取り組むことのできる導入の工夫ができていたかどうか。

(2) 対話的なルール作りの工夫

1. 考えを伝え合う。2. いいところを見つける。3. 考えをまとめる。

グループで協力して話し合い活動を行い、考えを深めることができていたか。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

ワークシートを使って、めあてにそった振り返りができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

本教材に登場する猫とねずみは、ふつう「食う－食われる」の関係にあり、初発の感想の中にも、猫がねずみを食べなかったことを不思議に思う児童も多く、興味をもって読み進めることができた。また、題名でもある「ニャーゴ」という言葉が、何度も文中に出てきて、それらの意味について考える中で、気持ちの変化に気づくこともできていた。本教材は、人物の行動や気持ちを具体的に想像し、想像したことを音読で表すことができることを設定した単元であり、会話文や心内語が多く、場面ごとに登場人物の行動や様子を読み取り、想像を広げて読む力をつける必要があった。

そのため、叙述に即して登場人物になりきって、音読をしたり、動作化したりするなどして想像を広げて読むことができるような指導を心掛けた。そこで、二つの手立てを中心に取り組んだ。

一つ目は、教科書に色分けをしたことだ。猫の様子や言葉には赤のサイドライン、子ねずみたちの様子や言葉には青のサイドラインを引いた。そうすることで、「誰が」「どうした」の関係を正確に捉え、登場人物の気持ちを想像するときや、役割読みの場面で児童の助けになった。

二つ目は、動作で表現したり、ほかの言葉で置き換えたりする活動を取り入れ、登場人物の気持ちについて想像を広げられるようにした。特に題名でもある「ニャーゴ」という言葉は、何度も文中に出てくるが、それらの意味はすべて異なっている。最初子ねずみたちを見つけた猫は「ニャーゴ」という言葉にどんな思いを込めたのか、去り際の「ニャーゴ」にはどんな思いが込められているのかなど、猫になりきって想像してきた。そうすることで、最後の音読劇の発表会では、「ニャーゴ」という言葉に強弱をつけて音読をしたり、手を振り上げるなどの

動作をつける姿も見られるようになった。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

これまで、様々な場面でペアでの意見交流や、グループでの話し合いの場を設けてきた。年度当初は人物の気持ちなど考えて書くことに抵抗がある児童が多かった。しかし、ペアでの意見交流を繰り返すことで、自分の考えを文字や言葉で表すことができるようになった。また、友だちの考えを聞いて、より自分の考えを深めることができ、それが自信につながっていたように感じた。2学期からはそれぞれの考えを聞いて、共通点やいいところを見つけながら考えをまとめるグループ学習を取り入れた。話し合いを進める人と、話し合いでまとまったことを発表ボードに書く人、まとめたことを発表する人の3つの役割に分けて、全員が積極的に参加できるように指導・支援を行った。また、1. 考えを伝え合う。2. いいところを見つける。3. 考えをまとめる。の3つの工程を示すことで、児童が自分たちでグループ学習を行うことができるようにした。これまで伝え合いにとどまっていたものが、なぜそう考えたのか理由をつけて説明できる児童や、友だちの考えと同じところに目を向けて話し合いを進めることができる児童も増えてきた。また、初めは一番納得のいく意見を選んでいくグループも多かったが、それぞれのいい言葉を組み合わせでよりよい考えを作り出そうとする児童も見られた。今後も「自分の考えとその理由」を活発に交流できるよう指導を継続していきたい。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

毎時間めあてにそった振り返りを行ってきた。そのため、振り返りを見ることで児童の理解度が把握できた。しかし、本単元の目標は「気持ちを音読であらわそう」であったため、考えたことについて全体でまとめをし、学習したことを生かした音読をすることでより学習が深まったのではないかと考えた。

13. 成果と課題

○児童は、登場人物になりきって音読することを楽しみ、読むことに苦手意識がある児童もスムーズに読むことができるようになった。

○ポイントになる部分をノートに書き写すことで、一つひとつの言葉に着目して読み取ることができた。

○交流の場面では、ペア交流とグループ活動を取り入れ、自分の考えを整理したり、友だちの考えを聞いて新しい発見をしたりでき、考えを深めることができた。

●音読教材であるため初めの音読と、終わりの音読の時間を十分に確保することでより学習を深めることができたように思う。

●話し合いの活動の中で、伝え合いに終わらず、意見や感想、質問などをして、活発なグループ活動ができるよう、指導を継続していきたい。



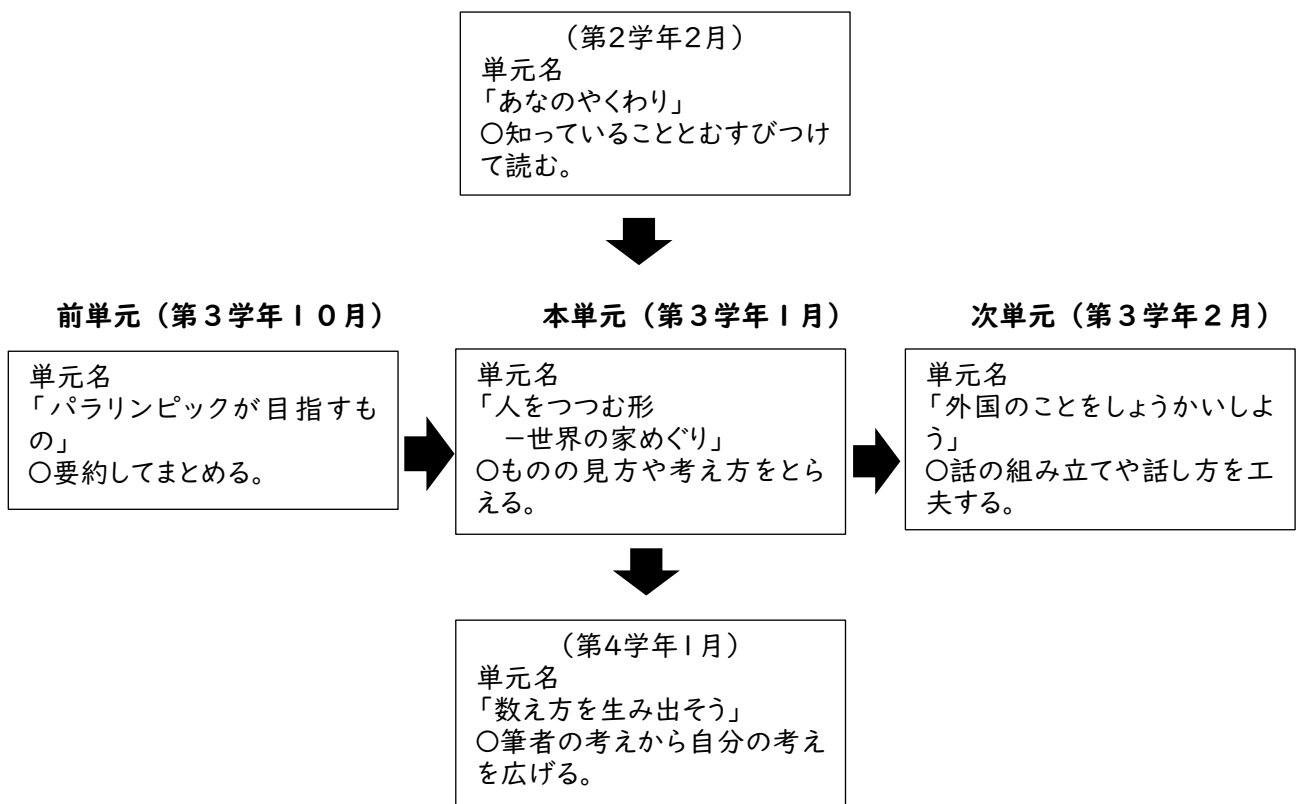
第3学年

1. 日 時 令和5年1月24日(火) 第5時限(13:50~14:35)

2. 学年・組 3年2組 (教室)

3. 単 元 名 世界の家のつくりについて考えよう
(「人をつつむ形ー世界の家めぐり」東京書籍3年上)

4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

○筆者の考えと、理由や事例との関係に気を付けながら、筆者のものの見方や考え方を捉え、感想や考えを持つことができる。

- ・考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解することができる(知識・技能)
- ・「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持つことができる。
- ・「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。
- ・「書くこと」において、相手や目的を意識して書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にできる。(思考・判断・表現)

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解している。…C(2)ア	・「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基いて、感想や考えを持っている。…C(1)オ ・「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。…C(1)カ	・「書くこと」において、相手や目的を意識して書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にしている。…B(1)ア	・これまでに学習したことや他教科での学習経験を生かして学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、積極的に、文章を読んで理解したことに基いて感想や考えを持ち、読んで分かったことや考えたことを伝えようとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

児童は、三年下「パラリンピックが目指すもの」の学習で、要約することを学んできている。要約の仕方については理解している児童も多くいるが、どの部分を短くまとめればいいのかわからず、苦手意識を持つ児童も少なくはない。

「読むこと」に関しては、これまで①「問い」や「答え」がどの段落にあるのかを見つける活動②筆者の主張を裏付ける根拠が書いてある箇所を見つける活動③段落ごとに、何が書いてあるかを確かめる活動④何度も出てくる言葉に気をつけて読む活動を行ってきた。これらの学習は文章をしっかりと読み概ね見つけることができていた。しかし、本文を読んで自分の感想や思いを具体的に考えられる児童が圧倒的に少なく「〇〇がすごいと思った」や「〇〇が面白かった」など一言で答える児童が多い。また、本文に書かれている言葉の意味を分からず流れて文章を読み、意味を理解する児童もたくさんいる。そのため、言葉が持つ本来の意味を理解した言語活動につながっていない。

「話すこと・聞くこと」に関しては、積極的に自分の考えを話したい、聞いて欲しいという思いが強い児童と、明確な答えや考えを持っているものの全体場で発表することや話し合い活動に、不安や恥ずかしさなどから消極的になる児童に分かれる。積極的な児童の中には、考えが浅く思ったことをそのまま発言することが多いため、少しの時間考えてから発言するように指導している。また、消極的な児童には、様子を見ながら指導者が指名し発表を促すことで、少しずつではあるが発表の経験を積ませている。また、話し合い活動では、机間指導しながら気持ちが前向きになるように声掛けし、自信を持たせる指導を行っている。

「書くこと」に関しては、自分の経験したことや想像したことについて「はじめ、中、終わり」の文章構成を意識して書くことができる児童が多い。また、苦手な児童も教科書の見本を参考に正しい文章を書けるようになってきている。ただ、感想や意見などを具体的に書ける児童が少なく、短文で終わることが多い。

(2) 単元観

本単元の重点指導事項は、学習指導要領における【思考力、判断力、表現力等】の「C読むこと(1)オ「文章を読んで理解したことに基いて、感想や考えもつこと。」である。児童は、これまで文章を読み取るときに、自分の知識や経験と結び付けて考えることを学習してきた。その経験を踏まえ、文章や写真・絵などから読み取ったことを整理し、自分の考えに生かすことの定着を目指している。

本教材は世界各地の家のづくりを取り上げているが、どの家も、建築家が設計した家ではなく、その土地の人々が手に入れられる材料を使い、土地の特徴や人々の暮らしに合わせて造られた家が紹介されている。筆者が自分の考えをまとめた段落として明示していないものの、題名や紹介している家の書きぶり、写真などから、筆者の考えが示唆的ににじみ出る文章構造となっている。また、最後には本文中にはない日本の家のづくりについて考えたことを文章にまとめる活動も設定している。教材の中で読み取った筆者のものの見方・考え方をもとに、身近な事例へと応用する視点が必要となる。このように、文章と写真、絵の情報を関連付けながら、筆者の考えに沿って整理し、読み取らせる教材としては適している。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、学習の見通しを持たせるために指導者が作成した「世界の家新聞」をもとにした発表会のモデルを紹介する。そして、最後に、『世界の家新聞』で友だちと交流し合うために 自分の不思議に思った世界の家のつくりについて調べるという学習への興味を持たせる。さらに、世界の家について書かれた本を学級で何種類か事前に用意しておき、教科書の学習と並行して、自分の興味のある家について調べやすい環境を設定しておく。また、言葉の意味を理解させるために国語辞典で調べる時間を作る。活動は3人チームで行い、相談して本文の中でわからない言葉だけを調べさせる。それが、これから協力して学習を進めていくチーム作りの場になればと考えている。

第Ⅱ次では、本文で紹介されている様々な国の家のつくりについて読み取り、筆者のものの見方や考え方についてまとめていく。読み取りはそれぞれの国の「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の2つの観点に分け、それぞれの観点到線を入れて見つけさせ、全体で共有し表にまとめていく。さらに、モンゴルの家のつくりからは、表を活用してその国の家のつくりをみんなで一文にまとめる。一文にまとめる際はそのまま表の文を写させるのではなく要約することを伝える。また、2つの観点をつなげる言葉として「～から～」、「～ため～」などのつなぎ言葉を活用させる。ここでは、様々な要約した文章が生まれることが予想されるがどの文章も正しい答えとして認め次の国について要約するための意欲につなげさせたい。チュニジアでは同じことをチームで行い、本時のセネガルでは一人で考えさせる。要約を苦手とする児童も「みんなで」「チームで」「一人で」の段階を経て学習していくことで徐々に自信をつけさせ理解の深まりにつなげたい。また、発表する際はチームのメンバーを事前に①、②、③と決め、指導者がその日に決めた番号の児童が発表するようにする。そうすることで、様々な児童の発表する機会を増やしたい。

筆者のものの見方や考え方については毎時間、読み取りその後「不思議に思ったこと」や「驚いたこと」などを自分の感想として書かせる。ここでの感想は「〇〇がすごかった。」「〇〇が面白かった。」などの短文になるのではなく、何がすごかったのか、どのように面白かったのかより詳しく書かせたい。そのために「〇〇がすごかった。」「〇〇が面白かった。」などの文章の後に理由を書かせ「はじめ、中、終わり」を意識した文章になるように指導する。さらに、その感想をチームで共有し、良いところを見つけさせる活動につなげる。

第Ⅲ次では、「世界の家新聞」をチームで作らせる。ここでは、第Ⅱ次の学習を振り返り、世界の家について書かれた本を参考に一人が一つ記事を作成し、それを集めて1枚の新聞にする。その際、世界の家の紹介と感想を合わせて書かせるようにする。そして、児童が作った新聞は全体の前で発表する活動を通して、学習のまとめとして学級で振り返りを行う。たくさんの友だちに伝えることで満足感や達成感を感じさせる活動にしたい。

8. 学習指導計画(全13時間)

次	時	学習活動	指導・支援・評価
Ⅰ	1	○学習の見通しを立てる。	・「世界の家新聞」を見せ学習の見通しを持たせる。 ・本文を読み、様々な国やその場所を確認させる。 ・初発の感想を持たせ交流させる。
	2	○言葉の意味調べする。	・国語辞典を使い、言葉の意味調べをさせる。
Ⅱ	3	○ボリビア・ルーマニアの家のつくりについて筆者のものの見方や考え方を表にして読み取る。	・二つの国の「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の観点到分、説明されていることを表にして確認させる。 ・筆者のものの見方や考え方について驚いたことや不思議に思ったことを感想として書かせる。
	4	○モンゴルの家のつくりについて筆者のものの見方や考え方を表にして読み取る。	・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の観点到分、説明されていることを表にして確認させる。 ・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料

	5	○チュニジアの家のつくりについて筆者のものの見方や考え方を表にして読み取る。	<p>や家のつくりの工夫」がどのような関係にあるか全員で一文にまとめさせる。</p> <p>・筆者のものの見方について驚いたことや不思議に思ったことを感想として書かせ友だちと共有させる。</p> <p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の観点に分け、説明されていることを表にして確認させる。</p> <p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」がどのような関係にあるかチームで一文にまとめさせる。</p> <p>・筆者のものの見方について驚いたことや不思議に思ったことを感想として書かせ友だちと共有させる。</p>
	6 本時	○セネガルの家のつくりについて筆者のものの見方や考え方を表にして読み取る。	<p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の観点に分け、説明されていることを表にして確認させる。</p> <p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」がどのような関係にあるか一人で一文にまとめさせる。</p> <p>・筆者のものの見方について驚いたことや不思議に思ったことを感想として書かせ友だちと共有させる。</p>
	7	○三つの家のつくりについて、筆者の考えとの関係を確認する。	<p>・これまで整理してきた三つの国の家のつくりを振り返らせる。</p> <p>・国ごとに具体例は違うがどの国の家もその土地の特徴や人々の暮らしに合わせて、地元にある材料を使い工夫して作られていることを抑える。</p> <p>・「人をつつむ形ー世界の家めぐり」を学び、感じたことを感想として書かせる。</p>
	8	○竹富島の家のつくりについて表にして読み取る。	<p>・竹富島の家のつくりについての動画を視聴させる。</p> <p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の観点に分け、説明されていることを表にして確認させる。</p> <p>・「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」がどのような関係にあるか一人で一文にまとめさせる。</p> <p>・驚いたことや不思議に思ったことを感想として書かせ友だちと共有させる。</p>
Ⅲ	9 10	○単元の学習を振り返る。	<p>・「世界の家新聞」を作らせる。</p> <p>・学んだことを生かしチームで協力して作成させる。</p>
	11	○発表会を行う。	<p>・作成した「世界の家新聞」をチームで協力して発表させる。</p> <p>・友だちの発表を聞き、驚いたことや不思議に感じたことを書かせ発表させる。</p>

9. 本時の学習(11/6時)

(1) 目標

- ・セネガルの家のつくりについて、筆者の説明の観点に沿って読み取り感想を持つことができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の振り返りをする。 2. 本時のめあてを確認する。	・チュニジアの家のつくりについて振り返らせる。 ・本時の課題を提示し、ノートに書かせる。	全体 個人	前時の学習を振り本時で行う学習の見通しを持つことができる。
㊦ セネガルの家のつくりについて読み取り感想を持とう。				
精査・解釈	3. 本時で学習する本文を音読する。	・立って自分に聞こえる声で音読し、終わったら座らせる。	個人	見つけた観点を一人で要約して一文にすることができる。
	4. 「土地の特徴や人々の暮らし」「地元にある材料や家のつくりの工夫」の2つの観点を本文から見つけ教科書に線を引く。	・本文に定規で線を引かせる。	個人	
	5. 見つけた観点を共有し、表にまとめていく。	・見つけた観点を共有し、黒板の表にまとめていく。	全体	
	6. まとめた観点を一文にする。	・まとめた観点を「～から～」や「～ため～」のつなぎ言葉を使い、要約して一文にさせる。	個人	
	7 書いた一文をチームで確認しあう。	・チームの友だちと書いた一文を見せあい確認させる。	全体	
考えの形成	8 セネガルの家のつくりを発表する。	・数名の児童に発表させる。		
	9. セネガルの家のつくりについて驚いたことや不思議に思ったことを感想として書く。	・文章の後に理由を書かせ「はじめ、中、終わり」を意識させる。	個人	「はじめ、中、終わり」の文章構成を意識して書くことができる。
共有	10. 考えた感想をチームで共有する。 11. 全体で共有する。	・友だちの考えの良いところを見つけて、考えを深められるようにする。 ・②番のチームの児童に発表させる。	チーム 全体	友だちの考えを聞き、自分の考えを深めることができる。

10. 板書計画

<p>⑩ セネガルの家づくりについて読み取り、感想を持つ。</p>	<p>土地のとくちよう 人々のくらし 家のつくり</p>	<p>・大きな川が海に 注ぐ所の近く。 ・屋根はじょうごのよう な形</p>	<p>・田で米を作っ たり川で魚や貝を とったりしている。 ・屋根で雨水を家の中に 取りこんで、飲み水とし て利用している。</p>	<p>・井戸をほつても しおからい水しか でない。 ・屋根は、わらとマン グローブのみきで、でき ている。</p>	<p>○井戸をほつてもしおからい水しかでないから、 家の屋根をじょうごのような形にして雨水を取 り込んで飲み水にしている。</p>	<p>⑩ おどろいたことふしぎに思ったことを感想に書 こう。</p>
-----------------------------------	--------------------------------------	--	--	---	---	--

11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

筆者の考えを読み取った後、整理し全体で共有する時間を短くする工夫ができていたかどうか。

(2) 対話的なルール作りの工夫

① 感想を伝える。② いいところを見つける。

チームで協力して話し合うことができていたか。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

筆者の考えを読み取り、自分なりの感想を持つことができていたか。

友だちの感想を聞き、自分の考えを深めることができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

本時では、「考えの形成」の時間を十分に確保するために「精査・解釈」を短時間で学習できるように工夫した。具体的には、本時の学習の「5. 見つけた観点を共有し、表にまとめていく。」活動において、見つけた観点を個人ではなくみんなで共有し黒板に表でまとめた。また、見つけた観点も事前に予想し短冊で用意しておき、黒板に貼り付けた。そうすることで児童が板書を写す時間や指導者が黒板に書く時間を大幅に短縮することができた。また、「6. まとめた観点を一文にする。」活動では、それまでのモンゴル、チュニジアと観点をつなげる言葉として「～から～」、「～ため～」などのつなぎ言葉を毎回活用して文章を組み立てさせてきた。その成果もあり、スムーズにセネガルの家づくりを一文にすることができていた。その結果、「考えの形成」ではセネガルの家づくりについての感想を書く時間や、感想を友だちと共有する時間を十分に取ることができた。

(2) 対話的なルール作りの工夫

本時では対話的な活動を「考えの形成」の「10. 考えた感想をチームで共有する。」で行った。セネガルの家づくりを学習後、驚いたことや不思議に思ったことについて感想を書かせた。その後、チームの児童で感想を交流し、お互いのいいところを伝えあった。事前にチームの中で①、②、③と番号を決めていたこともあり、指導者のその日の指示で感想を伝える順番を理解しスムーズに伝えあうことができていた。また、伝える児童はチー

ムの児童に聞こえる適切な声のボリュームについて事前に指導していたこともあり、互いのチームの妨げとならずみんなが聞き取りやすい話し合いとなった。

良いところを見つける活動では本単元を学習した当初はどのように見つけていいのかわからず、「〇〇さんの声は聞き取りやすい」「文章がはじめ、中、終わりに分かれていてわかりやすかった」など伝えた児童の良いところではあるが、感想を聞いて自分の考えを深める活動には至っていなかった。そこで、聞いた内容について自分の書いた感想と似ているところや違うところ、考えもつかなかった発想などについて伝えるように指導してきた。その成果もあり、本時では「〇〇さんの感想のこの部分が似ている」や「その感想は思いつかなかった」など自分と相手の意見を比べた感想を聞くなど、相手の意見の良さを大切に、チームで考えを深めることができた。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

本時の深い学びにつなげるための振り返りの工夫として本時の「考えの形成」における「9.セネガルの家のつくりについて驚いたことや不思議に思ったことを感想として書く。」と「10.考えた感想をチームで共有する。」で行った。9.では、「はじめ、中、終わり」を意識した感想を書かせた。「はじめ」では「〇〇が面白かった。」や「すごいと思った」などセネガルの家について思ったことを自由に書かせた。「中」は『なぜなら』と文章を続けて「はじめ」で思った理由を考えさせた。「終わり」では、その理由を踏まえて再度自分の感想を「はじめ」とは違う表現の仕方でも書かせる指導を行った。難しそうにしていた児童も「中」の『なぜなら』で文章を続けさせたことで自分の中での思ったことをより明確に考えるきっかけとなった。また、本時までに様々な国の家のつくりで繰り返し反復して学習してきたこともあり「はじめ、中、終わり」の構成を意識した文章を書くことができた。さらに、感想を書くことで読み取ったことを改めて考えさせる活動となり筆者の伝えたいことについて振り返ることができた。

10.11では友だちの感想を聞き、自分の書いた感想と似ているところや違うところ、思いもつかなかった発想などを見つけて伝える活動を行った。この活動を通して友だちの様々な感想を聞き、自分にはなかった新たな筆者の考えに気付くことができた。また、児童たちは自分なりに良いと思ったことも伝えることができていた。ただ、話し合いの仕方としてよいところを一言で伝える児童や、数パターンの定型的な言葉で良いところを伝える児童が多く、活発な話し合いにはならなかった。継続的に話し合いの活動をもっと行うことで、話し合いが活発になり更なる深い学びにつなげるための振り返りにつなげることが大切だと考える。

13. 成果と課題

- 世界の家について書かれた本を学級で何種類か事前に用意したことで本学習への興味や関心を持たせることができた。
- 精査・解釈を短時間でおこなうことで「考えの形成」に十分な時間を確保することができた。
- 本文から書くことを選び、集めた材料から筆者の伝えたい様々な国の家のつくりについて書くことができた
- 文章を読んで理解したことに基づいて「始め」「中」「終わり」の文章構成を意識させた感想や考えを持つことができた。
- 深い学びにつなげるための振り返りについて指導者が明確なビジョンを持っていなかった
- 世界の家新聞の完成後に行わせた児童たちの発表について。

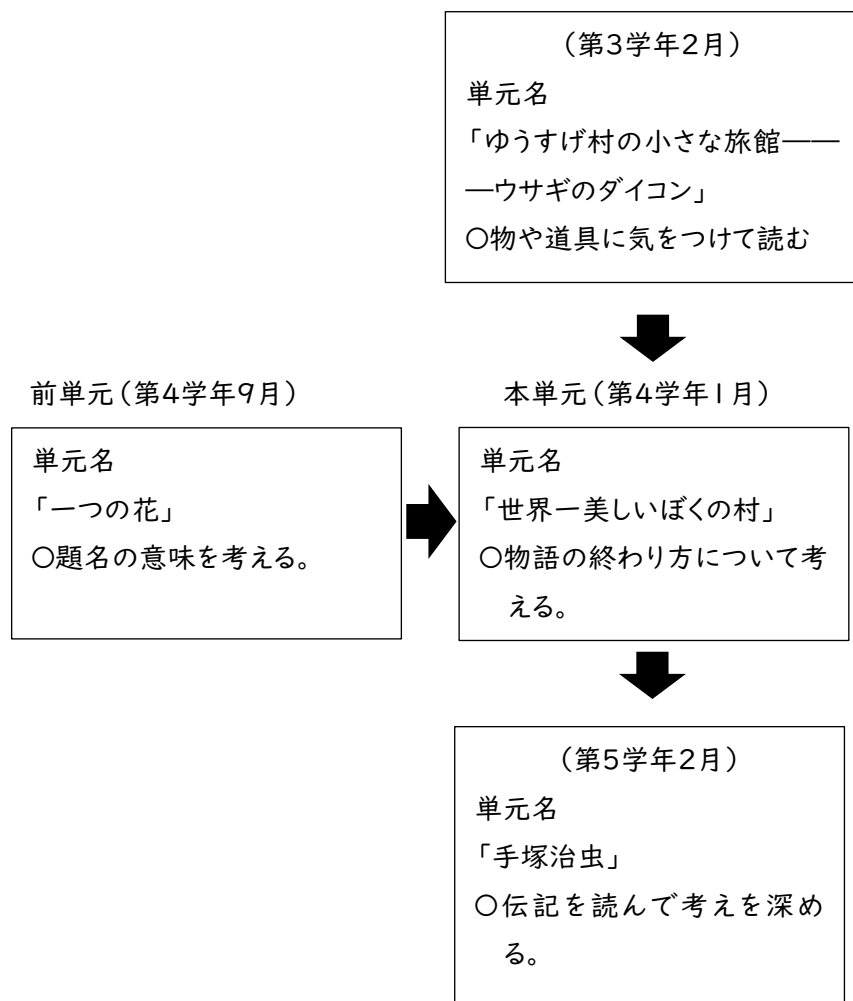
どのチームも自信を持った発表をすることができていなかった。新聞ではなく、ICT 機器を使った発表ノートやパワーポイントなどを活用することで児童たちの興味や関心を持たせることができたのではないかと考える。

第四学年

国語科学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○ ○○

1. 日 時 令和5年1月17日(火) 第5時限(13:50~14:35)
2. 学年・組 第4学年2組 在籍27名
3. 単 元 名 「読んで感じたことを伝え合おう」(「世界一美しいぼくの村」東京書籍 4年下)
4. 単元間の関連



5. 学習目標

○物語の結末について感じたことを伝え合い、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付く。

・幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くことができる。(知識・技能)(3)オ

・文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。(考・判断・表現)C(1)カ

6. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付いている。… (3)オ	・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。… C(1)エ ・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持っている。…C(1)オ ◎文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。…C(1)カ	・相手を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にしている。…B(1)ア	・これまでに学習したことを振り返って学習活動を明確にし、学習の見通しを持って、進んで感じたことや考えたことを伝え合い、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付こうとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、感受性が豊かであるが、感想や自分の考えを持つことになると苦手意識が強い。そのため、学習の中で印象に残った叙述を書き抜くことができても、感想を書くとなると「おもしろかった」「かわいそうだった」と短い言葉で表現することが多かった。それは、感想や自分の考えの表現方法がわからないことが原因だと考えられる。しかし指導者が「どこがおもしろかったの?」「どうしてかわいそうだったの?」と問いかけると、そこから考えることができる児童は多く、そこで、叙述から感じたことを書く学習を取り入れ「〇〇と書いてあるところから～と思った。」という文型でノートに感じたことを書くように指導した。これにより、叙述とそこから感じたことをつなげることができる児童は増えてきたが、自分の感じたことに、自身の経験や知識から理由をつけて、感想や自分の考えを持つことができる児童は少ない。

話し合い活動は、年度当初より、さまざまな場面で取り入れてきた。最初は、自分の思いついたことを話す児童が多く、なかなか話し合い活動にならなかった。しかし、話し合い活動をくり返す中で、相手に自分の思いを伝えるためには、どのように話せば良いのか考えて、話すことができる児童も増えてつある。

(2) 単元観

本単元の重点指導事項は、学習指導要領における【思考力、判断力、表現力等】の「読むこと」(C(1)カ)「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。」である。本教材では、アフガニスタンの村のパグマンに住む少年、ヤモの一日を取り上げ、日々の生活が戦争によって破壊される悲惨さを感じさせる物語である。最後の一文で物語が大きく展開し、読み手に強い印象を与えるため、物語の終わり方について考え、感想を交流するのに適した教材である。また、同じシリーズの物語「世界一美しい村へ帰る」と合わせて読むことで、パグマンの村や登場人物のその後について知ることができ、つながりのある物語を読むことの面白さを感じることができる。「世界一美しい村へ帰る」の最後の一文も印象的であり、「世界一美しいぼくの村」の最後の一文と対応している。終わり方を比較して読むことで、作品世界の広が

りを感じたり、物語から伝わってくることにについて考えたりすることができる教材である。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、「世界一美しいぼくの村」の範読を聞いたあとに、どの場面でどんなことを思ったのかを初発の感想として書く。そして、今後の学習のために、追い読みや交代読みを行い、情景を思い浮かべられるようにする。

第Ⅱ次では、第Ⅰ次で書いた初発の感想をもとに、物語の内容を確認しつつ感想を交流する。場面の移り変わりがわかりやすいように並べていき、最後の場面に感想が集中していることを視覚的にとらえやすくする。本時は、物語の内容を確認して、感想を交流できるようにすることが目標である。まず、挿絵を使い、場面の内容の確認を行う。さらに、その場面の感想を書いた児童に発表をさせ、その感想を聞いてどう思ったのかを他の児童が考えて発表することで、意見の交流ができるようにしていきたい。児童の実態から、第一場面から第三場面は全体で交流を行う。第四・五場面は、児童の発表の後にペアで交流ができるようにする。そして、第六場面は、たくさんの児童が感想の発表をすることが予想されるため、班で意見の交流を行う。段階を作った意見の交流の場を設定することで、どのように伝えれば相手がわかりやすいのかを自分で考えられるようにつなげていきたい。最後に、物語の最後が印象的であることを確かめた後、これからの学習では、物語の終わりに注目しながら、読んで感じたり考えたりしたことを伝え合う活動をしていくことを確認する。

第4時から第6時では、ヤモの気持ちを考えることで物語を読み深めていく。そのために、主人公の気持ちを考える手立てとして、ヤモのつぶやきを書き、その理由を叙述から考える。その後、交流するときは話型を活用し、どう伝えれば自分の考えが相手にわかりやすいのかを考えやすくする。また、叙述からヤモの気持ちや家族・ふささに対する思いを感じ取らせることで、最後の一文の意味を考え深められるようにつなげていく。

第7時から第12時では、「世界一美しい村へ帰る」を読んで、感じたり考えたりしたことを「世界一美しいぼくの村」と比較していく。二つの物語を読んで、新たに分かったこと・共通すること・最後の一文という観点で内容を読み取らせていきたい。そのために、ミラドーの気持ちを考え、二つの物語の関連するところを見つけたり、「春」という言葉が物語の中でどのような意味を持つのかを考えたりする。また、最後の一文を比較して、物語の終わり方について考え、友だちと交流する。

第Ⅲ次では、物語の終わり方について考えたことを確かめる。これまでのノートを見返し、自分の考えが、学習を経てどのように変容したかを振り返ることを大切にしたい。また、初発の感想と、単元の終末における自分の考えを比較させることで、児童に自分の考えの広がりや深まりを感じさせたい。

8. 学習指導計画(全13時間)

次	時	学習活動	○指導・支援・評価
Ⅰ	1	○物語を読んで、感想を書く。	○場面を明確にして、そこから感じたことや考えたことを書けるようにする。 ・書くための文型を用意する。
	2	○物語を、いろいろな読み方で音読する。	○情景を思い浮かべながら音読ができるようにする。 ・いろいろな読み方で、何度も音読させる。
Ⅱ	3	○物語の内容を確かめて、感想を交流する。	○自分の考えを感じたことと理由を明

	本時		<p>確にして交流させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵用意して、場面の移り変わりがわかりやすいようにする。 ・感想を短冊にして掲示することで、印象に残りやすい場面がどこであるかを視覚的に示すようにする。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
4		○ヤモの性格を考える。	<p>○教材文中の表現からヤモの人柄を考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵からヤモの思いを想像させる。 ・グループで交流をしてヤモの性格を言葉でまとめさせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
5		○ヤモの家族やふるさとを思う気持ちを考える。	<p>○ヤモの家族やふるさとを思う気持ちを読み取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵からヤモの思いを想像させる。 ・グループで交流をしてヤモの家族やふるさとへの思いを言葉でまとめさせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
6		○最後の一文について考える。	<p>○最後の一文があることで物語の印象が変わることに気付くようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵からヤモのつぶやきを書かせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
7		○「世界一美しい村へ帰る」を読んで、感想を交流する。	<p>○場面を明確にして、そこから感じたことや考えたことを書けるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書くための文型を用意する。
8		○ミラドーのヤモへの思いを考える。	<p>○教材文中の表現からミラドーのヤモへの思いについて考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵からミラドーの思いを想像させ

			<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで交流をしてミラドーのヤモへの思いを言葉でまとめさせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
	9	○ミラドーの家族やふるさとへの思いを考える。	<p>○ミラドーの家族やふるさとへの思いについて読み取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挿絵からミラドーの思いを想像させる。 ・グループで交流をしてミラドーの家族やふるさとへの思いを言葉でまとめさせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
	10	○季節を表す言葉に注目して、二つの物語を読み比べる。	<p>○「春」という言葉が持つ意味について考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節を表す言葉を丸で囲ませる。 ・「春」と「冬」とを比較しながら考えさせる。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
	11	○「世界一美しい村へ帰る」の最後の一文について考える	<p>○最後の一文に着目して、物語の終わりから伝わってくることを考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「世界一美しいぼくの村」の最後の場面をふりかえらせる。 ・二つの物語の変化している点を確認する。 <p>【思・判・表】</p> <p>◎C(1)カ ノート、行動観察</p>
	12	○最後の一文を比べて読み、感じたことや考えたことを話し合う。	<p>○最後の一文を比べて読み、感じたことや考えたことを話し合わせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「世界一美しいぼくの村」での学習をふりかえり、考えの変化や発展が感じられるようにする。 ・それぞれの物語の終わりから伝わって

			くる意味を考えさせる。 【思・判・表】 ◎C(1)カ ノート、行動観察
Ⅲ	13	○物語の終わり方について考えたことを確かめよう。	○物語の終わり方について、初発の感想とつながりのある物語を読んだ後の感想では自分の考えが広がったり深まったりしていることに気が付かせる。 ・これまでのノートを読み返させる。 ・二つの物語を読み比べた感想を交流させる。 【思・判・表】 ◎C(1)カ ノート、行動観察

9. 本時の学習(3/13時)

(1) 目標

・物語の内容を確認して、感想を交流することができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 音読する。	・短冊に感想を書いた場面を読ませる。	個人	・場面の情景を想像して読むことができる。 【思・判・表】 ・C(1)エ 発言、行動観察
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> ㊦ 物語の内容を確認めて、感想を交流しよう。 </div> 2. 挿絵を見て、内容の流れを確かめる。	・挿絵を用意して、子どもの発言から、挿絵を並べる。	全体	
精査・解釈	3. 初発の感想を交流する。	・挿絵の場面ごとに感想を読ませる。 ・場面ごとに短冊を掲示させる。 ・感想を聞いたり、掲示された短冊を見たりして、気が付いたことを話し合わせる。 ・話し合いの人数がペア→グループと増えるようにする。 ・児童の気づきを板書して、似ているところや異なるところ、物語がつながっているところを整理する。	全体 ペア グループ	◎自分の感想や友だちの感想を比較して同じ点や異なる点に気付くことができる。 【思・判・表】 ◎C(1)カ 行動観察

考 え の 形 成	4. ふりかえりをする。	・板書を見て気が付いたことを書かせる。 ・最後の一文のところに短冊が集中していることに注目させる。	個人	
共 有	4. ふりかえりを交流する。	・全体でふりかえりを共有して、物語の終わり方について学習していく意識を持たせる。	全体	・物語の終わり方について考えるという学習課題をとらえることができる。 【思・判・表】 ・B(1)ア ノート

10. 板書計画

③ 最後の場面に感想がたくさん集まっている驚いた。 ・場面と場面につながりがあることが分かった。							④ 物語の内容を確かめて、感想を交流しよう。 ☆物語の終わり方について考える 世界一美しいぼくの村
	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="display: flex; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div> <div style="display: flex; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div> <div style="display: flex; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="display: flex; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="display: flex; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 30px;"></div> </div>	

11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

明確な学習課題の設定と、学習課題にスムーズに取り組むことのできる交流の工夫ができていたかどうか。

(2) 対話的なルール作りの工夫

全体→ペア→グループの順で話し合い活動を行い、一人ひとりの感じ方の違いに気づくことができていたか。

(3) 深い学びにつなげるためのふりかえりの工夫

板書を整理して、注目するところを示すことで、何についてふりかえればよいかとらえることができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

挿絵を用意して並べることで、物語の大体の流れを思い出せるようにした。内容を覚えている児童が多く、この活動で学習意欲が持った児童もいるが、予定よりも時間が長くなってしまった。

各場面で出た感想を聞いた後、気が付いたことや自分の感想と比べてどうなのかを隣の席の児童と交流す

る時間を各場面2分間ずつ用意した。感想を発表して短冊を素早く貼ることはできていたが、話し合いがすぐに始まらず、十分に感想を交流する前に時間が終わってしまうことが多かった。これは、児童に話し合いのめあてがよく伝わっていなかったことが原因であると考えられる。また、児童が感想の伝え合いだけでは満足できなかったことも話し合いが進まなかった理由だと思う。本実践では、一場面ごとに感想を交流する場面を設定したが、話し合いのめあてをもっと具体的にして感想を交流するタイミングを再考する必要があった。

(2) 対話的なルール作りの工夫

本実践では、話し合いの場を多く設けた。学習が進むにつれて、話し合い活動が活発にはなったが、子どもが話し合いの必要を感じさせるには至らなかった。六場面は物語の内容も急に変わり、それぞれの子どもが感じることも多くあったため、話し合いはできていたが、1～5場面についてはヤモの日常が物語の中心となる。挿絵や本文の細かな表現に気付ける児童は、話に参加できるが、そうでない児童にとっては内容を確認するだけで精一杯になってしまった。内容を確認しつつ、児童の感想を活用し活発な話し合いにするために、内容理解を深める必要があった。

全体→ペア→グループの順に話し合いを行った。学習時間の中で誰もが自分の意見を言う時間をとることはできたが、どの場面でも聞くことが不十分であった。児童が話す時間と聞く時間を意識できるように今後の学習では意識していく。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

六場面に感想は集まっているところを視覚的に示すことはできた。児童は六場面が印象的であり、内容が急に変わったため感想が集まっていることにも気が付くことができていた。しかし、振り返りの時に「なぜ、感想が六場面に集中しているのか」を考えさせることにとらわれてしまい、子どもの「最後はどんよりしている」「一場面と反対になっている」という発言を深く掘り下げることが不十分であった。児童に「なぜそのように感じたのか」を説明させ、掲示してある感想も活用してまとめることで、より物語の理解や終わり方が重要であることを感じさせることができたのではないかと思う。

黒板に感想を掲示したが、一番後ろの席からは見えづらい子どももいた。また、感想に対する気付きを板書にまとめていったが、整理が不十分だったため、いろいろな感想があることは、学習時間内で気が付いていても、板書を活用した振り返りがしにくいように感じた。感想を書く用紙や整理の仕方、まとめ方の工夫を今後も考えていく必要がある。

13. 成果と課題

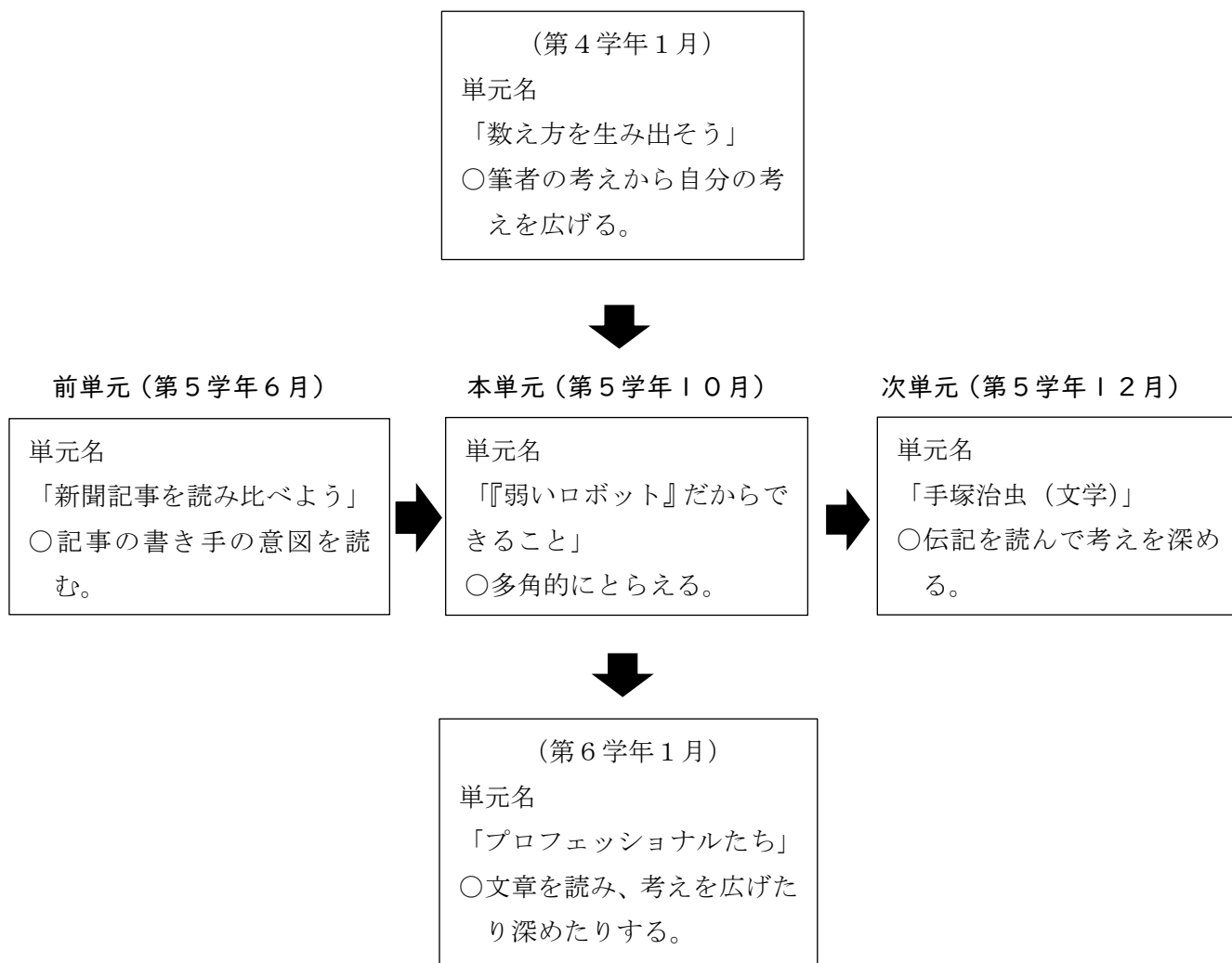
- 感想を短冊に書き掲示することで、児童全員の学習への参加意識が芽生えた。
- 挿絵を活用したノートづくりの工夫をしたことで、児童が考えるための助けになった。
- 板書で子どもの考えをまとめるためには、もう少し時間の工夫が必要だった。
- 板書の整理の仕方の工夫を考え、振り返りに活かせるようにする必要があった。

第五学年

国語科学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○ ○○

1. 日 時 令和5年2月7日(火) 第5時限(13:50～14:35)
2. 学年・組 5年1組 (教室)
3. 単元名 「テクノロジーの進歩について考えよう」
教材(『『弱いロボット』だからできること』東京書籍 5年下)
4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

○あるテーマについて、異なる面から見た複数の文章を読んだり自分の経験や知識と照らしたりしながら

ら多角的に捉え、自分の考えを深めることができる。

- ・文章の構成や展開について理解することができる。(知識・技能)
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。(思考・判断・表現)

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・文章の構成や展開について理解している…(1)カ	・目的に応じて、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりしている…C(1)ウ ◎文章を読んで、理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。…C(1)オ	・事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。…B(1)ウ	・これまでに学習したことを振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、積極的に書かれていることを多角的に捉え、自分の考えをまとめようとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、説明文の学習を通して、題名や文章表現、文章構成などに筆者の意図が込められていることを学んでいる。さらに、何度も出てきている言葉や題名に関連した言葉を見つけたり、叙述を基に自分の考えを書いたりすることもある程度できている。だが、それを発表するとなると自信の無さから発言できない児童が多い。そのため、各教科の時間でペアやグループで話す活動に取り組んでいるが、発言する児童に偏りがあるのが実状で、全体の場での発表も同様である。そこで、ペアやグループで話すときのルールを設けたり、挙手制以外の発表の場をつくったりして、自然に話せるような環境づくりを行っているが十分ではない。

話すことだけでなく書くことに課題をもった児童もいる。自分の考えをノートに書くとき、考えがまとまらず書き出しの遅い児童が多い。そのため、「書く→話す」の思考の順以外にも、場面に応じて「話す→書く」の思考の順も取り入れて、考えを文章で表しやすいような場の設定も取り入れている。また、語彙力に差があるため、個に応じてヒントとしてキーワードを提示して、自分で文章をまとめられるように指導している。

(2) 単元観

本単元の重点指導事項は、学習指導要領における【思考力、判断力、表現力等】の「C 読むこと」(1)オ「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」である。本教材の一つ目の文章はテクノロジー加速的な進歩を遂げる中、その背景にある、「便利で高い性能を持つものほどよいものだ」という一般的な考え方に警鐘を鳴らすものである。あえて不完全に作られた「弱いロボット」は、こうした問題意識の元に作られ、「『弱さ』を受け止め、たがいにに関わりながら生きていくこと」に、テクノロジーと人間の共存の未来を見ている。これに対し二つ目の文章は、人間の力を超えたテクノロジーの姿や、それが見せる豊かな未来を主張している。そして、この立場の異なる二つの文章を読み、それぞれの書き手の意図を捉えながら、物事を多角的に考える力を身に着けることを目指している。立場の異なる二つの文章を読み、友だちと意見を交わすことが、テクノロジーの進歩についての自分の意見をまとめ、考えを広げたり深めたりすることにつながる教材として適している。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、テクノロジーと人との関わりについての自分の考えを深めるという学習課題につなげるために、身の回りのテクノロジーを具体的に想起させる。その際、児童が出した例について、メリットとデメリットの二点をそれぞれ考えさせることで、テクノロジーと人との関わりに対しての関心を高めたい。

第Ⅱ次では、立場の異なる二つの文章を読む前に、テクノロジーが人と関わるうえでこのまま進歩してもよいかどうか書かせる。これは、単元の最初と最後で考えがどう変わったか明確にするためである。その後、二つの教材文を読ませ、感想を話し合わせる。話し合いのときは、相手の意見に対し頷いたり質問をしたりするよう声掛けをする。

次に「弱いロボット」とはどのようなロボットかを、叙述を基に読み取る。特に、「弱いロボット」の「弱さ」が生み出す利点について文章の中から探す時には、「うれしい気持ち」や「人間との心地よい関係」など、人間の心情との関わりについて触れている箇所も着目してまとめていきたい。また、全員が叙述から読み取ることができるよう、教科書に線を引いたりペアで確認したりしながら学習を進めていく。

さらに、筆者の主張について読み取っていく時には、まずは筆者が警鐘している「便利で高い性能を持つものほどよいものだ」という一般的な考えが世の中に定着していることに着目させる。そこから「弱いロボット」や赤ちゃんのもつ「弱さ」が人々の関わりを生んでいることを押さえ、核となる「便利なこと」よりも「関わり」の方が大切である筆者の主張に気づかせたい。

最後に「弱いロボット」が必要かどうかについて話し合わせるために、二つ目の教材文の読み取りを行う。その後、必要か不必要か立場を明確にさせ、なぜその立場になったか叙述を基にした理由をしっかりと持たせる。さらに、経験や既知から理由を書いていのように声かけをすることで、多角的な意見が出るようにしたい。必要と不必要の立場に偏りがある場合は、テクノロジーを使う人の視点を変えて考えさせたい。例えば、足の不自由な高齢者が使う場合だと、弱いテクノロジーでは心地よい関係とは言えない。逆に、悪い人が強いテクノロジーを使うとどうなるかなど、自身以外の人を使う場合も想像させることで、児童の考えが広がるようにしていく。

話し合いを行うときのルールとして、相手の考えと自分の考えの相違点や類似点を意識して聞くようにさせる。そうすることで、友だちの考えから自分の考えを広げたり深めたりすることをねらいたい。

第Ⅲ次では、テクノロジーと人との関わりについて最後の考えをまとめさせる。ここでは、始めに書いた自分の考えと比べて、どこがどのように変わったかを書かせる。その際、「初めは～と思っていたが、今は～のように思っています。なぜかというところ・・・」のように、話型を統一することで自分の考えを順序だててまとめられるようにしたい。

8. 学習指導計画（全13時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	○学習の見通しを立てる。	・「テクノロジー」と聞いて何が思い浮かぶか話し合い、出たものについてメリットとデメリットの二点を考えさせる。 ・B(1)ウ
II	2	○テクノロジーがこのまま進歩	・単元の最後に、自分の考えがどう変わったか

		<p>してよいかどうか考える。</p> <p>3 ○「弱いロボット」について考える</p> <p>4 ○筆者の主張を読み取る。</p> <p>5 ○二つ目の文章を読み取る。</p> <p>6 本時 ○弱いロボットは必要かどうかを考える。</p>	<p>を考えるために、二つの文章を読む前に自分の考えを書かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書の二つの文章を読み、感想を話し合わせる。 ・二つの文章に書かれた内容や、友達と話し合ったことを基にして、テクノロジーと人との関わりについての自分の考えをまとめるという学習課題を確認する。 ・C(1)オ ・「弱いロボット」とは、どんなロボットなのかを教科書の叙述から抜き出させる。 ・人間とロボットの関係について着目させる。 ・叙述を基に、弱いロボットについて考えたことを話し合わせる。 ・(1)カ ・「便利で高い性能を持つものほどよいものだ。」という一般的な考えが問題点であることに着目させる。 ・(1)カ ・二つ目の文章が一つ目の文章と対照的に書かれていることに気づかせる。 ・テクノロジーが進歩することによって、自分たちやその他の人々の暮らしがどう変わるかを考えさせる。 ・次時に向けて、「弱いロボット」は必要か不必要か立場を明確にさせるためにノートに書かせる。 ・C(1)オ ・なぜその立場なのか、二つの文章から必ず叙述を基にして理由を考えさせる。また、経験や既知からも理由を書いていよう声をかけ、話し合いの中で多角的な意見が出るようにする。 ・話し合いの前と終わりで、友だちの考えが自分の考えにどう影響したかを考えさせる。 ・C(1)オ
Ⅲ	7	○テクノロジーの進歩と人との	・「テクノロジーが進歩することに対して～だと

		関わりについてまとめの考えを書かせる。	<p>思います。なぜなら・・・」と話型を提示して書かせる。また、テクノロジーと人との関わり の視点から外れないよう声掛けをする</p> <p>・B(1)ウ</p>
--	--	---------------------	---

9. 本時の学習（6/7時）

(1)目標

・「弱いロボット」が必要かどうか話し合い、自分の考えを広めたり深めたりすることができる。

(2)展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	<p>1. 筆者の主張を確認する。</p> <p>2. 本時のめあてを確認する。</p>	<p>・児童のノートをテレビに写し、筆者の主張を短く振り返る。</p>	<p>一斉</p> <p>一斉</p>	
	<div>㊟弱いロボットは必要かどうかを考え、話し合おう。</div>			
精査・解釈 考えの形成	<p>3. 2つのグループに分かれて話し合いを行う。</p> <p>4. 全体で発表する。</p>	<p>・各グループで、必要派と不必要派に分かれ話し合わせる。</p> <p>・相手の話が終わるまでは、質問をしたり、反論をしたりしないように指示する。</p> <p>・結論を出すのではなく、自分の考えを広めたり深めたりするための話し合いということを押さえる。</p> <p>・友だちの意見で納得したり、新しい発見があった場合は、ノートにメモをしてよいことを伝える。</p> <p>・児童の意見は教師が適宜黒板に書くようにする。</p> <p>・教材文のどこからそのように考えたのかを聞く。</p>	<p>グループ</p> <p>一斉</p>	<p>・叙述や自分の経験を基に、「弱いロボット」について考えを話すことができる。</p>
共有	5. 最終的な自分の意見を書き、発表する。	<p>・友だちの考えを聞いて、自分の考えの変わったところや納得したところなどを書かせる。</p> <p>・「弱いロボット」に対する様々な考えが</p>	一斉	<p>・叙述や友だちの意見を基に、自分の考えを</p>

		あることを感じさせる。	書くことができる。
--	--	-------------	-----------

10. 板書計画

⑥ 「弱いロボット」が必要か考え、話し合おう。

○必要

- ・不完全だからこそ周りの人の助けをひき出してつながりを生み出せるから。
- ・手伝うことの喜びが出るから。
- ・人々との関わりを作り出せるから。
- ・周囲の人同士の関わりを作り出せるから
- ・互いに支え合う心地よい関係が大切だと思っただから。
- ・ロボットが暴走したら困るから。
- ・人間を支配しないために。
- ・ロボットに任せてばかりで人間が何もできなくなるから。
- ・悪い人が強いロボットを使って悪用しても大丈夫なようにするため。

○不必要Ⅱテクノロジーの発展

- ・人間だけではできないことがあるから。
- ・「強いロボット」なら難しい手術もできるようになるから。
- ・便利になった方が幸せだから。

⑤

使い方を間違えなければ悪いことは起きないから。

④

始めはくだったけど、くな考えを聞いて・・・と思った

③

○○さんと同じ意見だったけど理由はちがって

11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

明確な学習課題の設定と、学習課題にスムーズに取り組むことのできる導入の工夫ができていたかどうか。

(2) 対話的なルール作りの工夫

1. 相手の話に対して反応を示し、最後までしっかりと聞く。
2. 共感できるところやできないところを意識して、友だちの意見を聞く。

他者の考えを聞いて、自分の考えに生かすことができたかどうか。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

友だちとの話し合いから、自己の考えの変化に気づくことができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

本実践において、導入時に筆者の主張を端的に確認した。その後すぐに、弱いロボットが必要かどうかについてのめあてを確認した。前時で弱いロボットが必要かどうか自分の考えをノートに書かせておいたため、めあての確認までの導入をスムーズに行うことができた。だが、必要派と不必要派の2グループに分ける際、必要派が多数となり話し合うための班編成に時間がかかってしまった。あらかじめ、班編成を決めておくことで、他の活動時間に充てられたのではないかと考えられる。

その後、2グループ内で話し合いを行った際、児童が話し合ったり考えたりする時間を確保するために、机間指導を行いながら適宜板書を行った。改めて児童から意見を聞き取らず、板書を活用し意見が共有できたことは、活動時間の確保につながったと考えられる。

2グループの話し合いの後、板書にある児童の意見を一つ一つ振り返った。一つの意見に対し、教科書のどこの文章からそう考えたのか児童に問答を続けたが、この活動時間が想定を大幅に上回り長くなってしまった。この活動をスムーズに行うためには、児童の意見と意見を線でつなげたり、囲んだりすることで、一つ一つの意見を振り返らないようにすればよいと考える。また、全体発表の時間が長かったため、その後に行う最終的な自分の意見を振り返る時間がほとんど確保できなかった。

様々な学習活動場面において、発問や指示を的確にしたり板書を構造化したりすることで、児童の主体的な学びの時間を確保していきたい。

(2) 対話的なルール作りの工夫

本実践では、弱いロボットは必要か不必要かを話し合った。話し合いは大きく分けて2つあり、最初に必要派不必要派同士で話し合う時間、次に必要派と不必要派で話し合う時間を設けた。最初の話し合いの時間では、話し合いのルールを明確に提示した。「一人1回は自分の意見を言う」、「友だちの話を終わるまで聞く」、「自分の意見と同じところや違うところを意識して聞く」の3つを提示してから、話し合わせることで、ほぼ全員が学習に対する参加意識をもつことができたと考えられる。また、3つ目に提示した「自分の意見と同じところや違うところを意識して聞く。」を重点的に提示したことで、本実践の2つ目の話し合いや振り返りにおける自分の考えの変容につながったと考えられる。

だが、時間配分がコントロールできていないことから、振り返ったことを基に話し合う時間が確保できなかった。この振り返りを発表し、話し合わせることで児童の考えがさらに広がり、根拠のある意見をもつことができたのではないかと考える。

本実践で提示した話し合いのルール以外にも、「相手の方に体を向ける。」、「相手の意見に反応を示す」などの基本的なことをしっかりと身につけさせたい。さらに、様々な教科学習で、「司会者を決めて話し合う。」、「質問を考えながら聞く。」などの対話が生まれるようなルールも設定して話し合いをさせていき、どの児童も自他の意見を尊重しあえるような環境づくりを行っていきたい。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

本実践では、友だちの考えを聞いて自分の考えの変わったところや、納得したところなどを振り返らせることを設定した。3つの話し合いのルールの内、「自分の意見と同じところや違うところを意識して聞く。」を提示したことで、児童が自分の考えがどのようなようになったか、スムーズに書くことができていた。また、板書に振り返りの話型を出したことで、普段自分の意見を書くことに戸惑いがある児童もすぐに取り掛かることができていた。だが、話型の中で「初めは・・・けど○○だと思った。」と出したことで、自分の考えが変わらない児童にとって、戸惑いが少し見られた。そのため、話型を数パターン用意しておき、多くの児童がスムーズに振り返りを行えるようにするべきだと考えた。

様々な教科学習において振り返りを設定しているが、普段の振り返りは個人か対教師に終わっている。今後は、ペアで振り返りをしたり、グループや全体で発表したりすることで、深い学びにつながる振り返りとなるよう、振り返ることの目的をきちんと設定していきたい。

13. 成果と課題

○単元全体を通して、自分の考えを必ず書いたり話したりさせることを徹底して指導した。さらに、友だちの考えを自分の考えに活かすことができるように、友だちが話しているときは最後まで聞くよう指導をした。そのため、どの時間でも自分の考えをノートに書いたり、友だちに話したりすることができる児童が増えたように感じる。

○単元の導入として、テクノロジーと聞いて思い浮かべるものをいくつか挙げさせた。その中から、児童にとって一番身近な自動運転を取り上げ、メリットとデメリットの二つの視点から自分の考えを書かせた。初めは、なかなか思い浮かばずに手が止まっている児童が多かったため、書く前にペアで話し合いを行ってから再度ノートに書くよう指示すると、多くの児童がスムーズに書くことができた。

○教材文を読みとってからは、文章のどこからそのように考えたのか、根拠を基に自分の考えを持つように指導した。そのため、多くの児童が発表するときに「教科書〇ページの〇行目のところから・・・」と話せるようになった。また、友だちがそのように発表した際、聞き手は必ず指定のページをすぐに開けるよう繰り返し促した。そうすることで、友だちの意見をしっかりと聞いたり、自分の考えに活かしたりする姿が多く見られた。

●単元全体を通して、構造的な板書をつくることができなかった。どの時間も児童の発表したことを羅列することが多く、考えの整理を板書上で行えていなかった。さらに、教師が板書をしている間に集中力が途切れたり、違うことを考えたりする児童の姿が見られたので、「板書されている文を追って読む。」や「教師の書く速さと同じ速さでノートに書く。」などの活動的な指示が必要だと感じた。構造的な板書を行うために、教材文の分析を十分に行い児童の意見を予想したり、机間巡視や机間指導の際に児童の考えを把握したりすることが重要だと感じた。また、児童の意見を板書するときは、単純に線や丸で囲むのだけではなく、学習のめあてと関連させるような意識をもてるようにしたい。

第六学年

国語科学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○ ○○

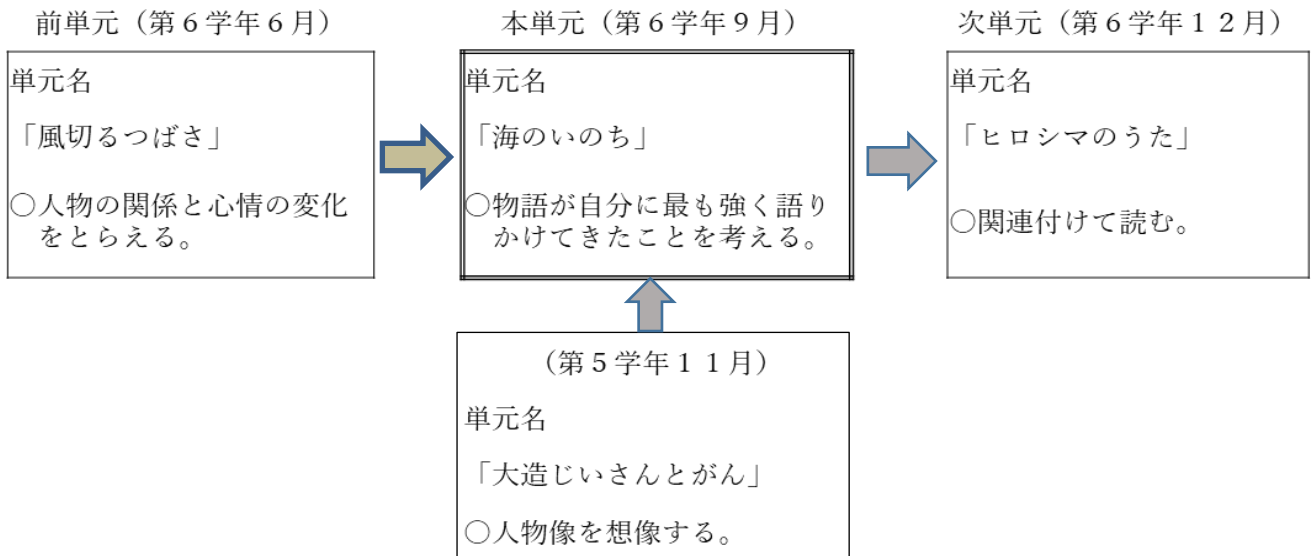
1. 日 時 令和4年9月22日(木) 第5時限 (13:50~14:35)

2. 学年・組 6年2組 (教室)

3. 単元名 「物語を読んで、考えたことを伝え合おう／海のいのち」

教材(「海のいのち」東京書籍 6年)

4. 単元間の関連



5. 学習目標

○物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考え、考えたことを文章にまとめることができる。

・読者として自分が思ったことや考えたことを踏まえ、表現性を高めて朗読することができる。(知識・技能)

・人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。(思考・判断・表現)

・文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめ、伝え合おうとすることができる。(主体的に学習に取り組む態度)

6. 評価基準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・読者として自分が思ったことや考えたことを踏まえ、表現性を高めて朗読している。…(1)ケ	<ul style="list-style-type: none"> ・「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。…C(1)エ ・「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめている。…C(1)オ ・「書くこと」において、事実と感想、意見とを区別して書いているなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。…B(1)ウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習経験や読書経験を振り返って学習課題を確かめ、学習の見通しを持って、粘り強く文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめ、伝え合おうとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、学習に対して意欲的に取り組める児童が多い。5年生の「大造じいさんとがん」の単元では物語の中で印象に残った場面を朗読することで、人物像を想像する学習を行った。さらに、6年生の1学期には「風切るつばさ」の単元で、人物の関係が互いの心情に与える影響について考える学習を行っている。

これまでの学習において、登場人物の相互関係や心情などについて、本文の描写を基に捉える力が身に付いている。また、文章を読んだ感想や内容に対する自分の考えを持ち、それらを共有して互いの感じ方について違いがあることに気付く児童が多く見られた。しかし、自分の考えは持っているが、どのように書けばよいか分からず、1文程度の抽象的な文章で書き終えてしまう児童や、自分の考えや意見に自信が持てず、積極的に発表できない児童が多く見られる。そのため、6月から宿題として週に2回「視写」を取り入れた。意味を考えながら書き、文と向き合うことで語彙力や文法力を身に付け、少しずつ読む力や書く力の向上に繋がってきている。また、指導者がランダムに児童をあてた際、発表できずに固まってしまう児童については「考え中です。」や「〇〇さんと同じで～」など、少しでも相手に考えや意見を伝えられるよう日頃から指導している。その成果もあり、全く何も答えない児童はほとんどみられない。

(2) 単元観

本教材「海のいのち」は、中心となる人物・太一が、父や与吉じいさんなどの、海に生きる人物との関わりを通して成長していく物語である。物語の中では太一が父の死を乗り越えて、与吉じいさんに弟子入りし、瀬の主との対峙を経て、自然と共に生きる漁師へと成長する姿が描かれている。それぞれの登場人物の人物像を捉えさせるとともに、人物の相互関係を手がかりに、物語の山場での太一の変化について深く考えさせられる教材である。また、本教材は「海のいのち」という題名や、物語の山場でのクエの描写、太一の成長を暗示する母の様子など、示唆に満ちた表現が随所に描かれている。さらに、会話文が少ない物語でもあるため、細かな表現や叙述にも着目することで、人間の成長や生き方などについて考えることに適した教材であるといえる。そして、本教材を通して学習を進めることで「読む」「書く」「聞く・話す」といった児童の言語活動をより育むことができると考える。「読む」ことに関しては、情景描写や行動描写、会話文などから人物像や、物語の全体像を具体的に想像することで読み解く力の育成に繋がる。「書く」ことに関しては、根拠や理由を明確にして書き表す力。「話す・聞く」ことに関しては、伝え合う活動の中での多様な意見や考えから、自分の考えを広げ深める力の育成に繋がる。このように言語活動を活性化することで、児童の思考力を高めていくことができる教材といえる。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、「物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考える」という本単元のめあてを確認する。まず、これまでに学習した「サボテンの花」と「風切るつばさ」の二つの物語を振り返らせ、登場人物の心情や考え方についてどのように感じたり、考えたりしたかを伝え合う。そこで、再度本単元のめあてを確認し、学習の見通しを持たせ教材の内容に入っていく。次に、場面分けに加えて四つの構成に分けることで物語の山場を意識させる。そして、まだ作品を読み深めていない段階での“物語が自分に最も強く語りかけてきたこと”を考えて伝え合い、感じ方や考え方の違いを実感させる。さらに、ここで出た意見を追求していくために学習を行っていくことを伝え、学習意欲を高めていきたい。

第Ⅱ次では、太一や与吉じいさんの人物像や生き方について考え、それぞれの存在が、太一の今後の生き方に影響を与えていったことについて自分の考えを深めさせる。

本時では、太一はなぜ瀬の主を殺さなかったのかについて考え、話し合う活動を行う。その際、父親や与吉じいさんが太一に与えた影響を振り返らせ、瀬の主についての描写と関連付けながら太一の心情を考えさせる。自

分の考えを書く際、うまく書き始められない児童や考えが持てない児童がいるため、人物についての描写や叙述に線を引かせ、それらの言動から太一の心情の変化とその根拠について考えを深められるようにする。また、班で伝え合う活動を行うことで、書けていない児童は多様な考えの中からヒントを得てほしいと考える。さらに、全体での発表が難しい児童についても自分の意見や考えを伝えられるように少人数での伝え合う場の設定をする。そして、話し合いを行う際には①全員が必ず自分の意見や考えを発表すること。②相手が話したことに対して頷いたり、良いところや疑問に思ったことを伝え合ったりすることを話し合いのルールとし、互いの立場や意図を明確にすることで対話的な学びを深めたい。振り返りでは「振り返りの4つのポイント」(①友だちの名前を出そう②意見の内容を書こう③本時の授業で分かったことや気付いたことを書こう④今の気持ちをありのままに書こう)を示す。①では、他者の意見や考えに関心をもつことで授業の中に繋がりを作ること。②では、誰がどんなことを言っていたかをしっかりと聞き、対話的な学びの向上に繋ぐこと。③では、本時の学習で学んだことを整理することで確かな学力の定着を図ること。④では、今のありのままの気持ち(疑問やこれからからの学習で知りたいこと、感じたことなど)を書くことで主体性をもって学習に取り組むことへそれぞれ繋がると考える。これらの4つのポイントを手立てに目的を持った振り返りを書かせることにより、児童一人ひとりが“どのような力が付いたのか”という実感に繋がりたい。

第Ⅲ次では、これまで学習を進めてきた上で“物語が自分に最も強く語りかけてきたこと”を短い言葉でまとめて伝え合う活動を行う。交流の際には、自分の考えたこととの共通点や相違点に着目させる。また、第3時の学習でまとめた“物語が自分に最も強く語りかけてきたこと”を比較することで、単元の学習を通して自分の考えにどのような影響を与えたかを実感できるようにさせたい。そして、自分が思ったことや考えたことを踏まえて、さらに表現性を高めて朗読ができるようにさせたい。

8. 学習指導計画(全10時間)

次	時	学習活動	指導・支援・評価
Ⅰ	1	○これまでに読んだ物語の中で心に残っていることを伝え合う。	○「言葉の力」を中心に既習事項を振り返りながら学習を進める。
	2	○物語を読んで、初発の感想を交流し、物語の場面分けと、山場を確かめる。	○八つの場面分けと、四つの構成(「始まりの場面」「出来事が山場に向かって進んでいくところ」「山場」「終わりの場面」)に分けるよう指示する。
	3	○物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考え、伝え合う。	○考えた理由をなるべく焦点化した言葉や文でまとめさせる。その際、どの言葉や表現からそのように感じたのか、文中に線を引かせる。
Ⅱ	4	○太一の父親の人物像や生き方について考える。	○太一の父親の人物像や生き方が、太一に与えた影響について考えさせる。その際、父親についての描写に線を引き、書き出すよう指示する。 ○「海のめぐみだからなあ。」という父の言葉や、漁に対する叙述から、父の海に対する考え方を読むことができるようにする。

	5	○与吉じいさの人物像や生き方について考える。	○与吉じいさの人物像や生き方が、太一に与えた影響について考えさせる。その際、与吉じいさについての描写に線を引き、書き出すよう指示する。 ○「千匹に一匹でいいんだ。」という与吉じいさの言葉や、漁に対する叙述から、与吉じいさの海に対する考え方を読むことができるようにする。
	6 本 時	○瀬の主に出会ったときの太一の心情の変化と、その理由について考える。	○「泣きそうになりながら思う」（葛藤）と「ふっとほほえみ」（父と見立てた）との間の心情の変化を考えさせる。 ○父や与吉じいさ、母が太一に与えた影響を振り返り、太一の心情を考えて、その根拠を本文から探し、理由をノートに書くよう指示する。
	7	○瀬の主と別れた後の太一の生き方について考える。	○もし、瀬の主を殺していたらどんな未来になっていたのかを考えさせる。 ○「村一番の漁師」と「一人前の漁師」とを比較して考えさせる。 ○「海のいのち」という題名の意味を考えさせる。
Ⅲ	8 ・ 9	○物語が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめ、伝え合う。	○短くまとめた言葉と合わせて、その言葉でまとめた根拠を、具体的な叙述や表現とともにカードにまとめさせる。
	10	○単元の学習を通して、自分の考えの広がりや深まりについて確かめる。	○友だちと感想を交流させる際は自分との共通点や相違点に着目させる。 ○初発の感想で書いた文章と比較し、読みの深まりを自覚できるようにする。○第3時でノートにまとめた物語が自分に最も強く語りかけてきたことと、前時でまとめたことを比較させ、単元の学習が、自分の考えにどのような影響を与えたかを実感させる。

9. 本時の学習

(1) 目標(6/10時)

・山場での太一の心情の変化を読み取り、なぜ変化したのかを考えることができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点(指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・太一が影響を受けた人物は「父」「与吉いさ」「母」と複数いたことを振り返らせる。 ・山場で起きた出来事確かめ、太一の心情の変化について考えていくことを伝える。 ・本時のめあてを提示し、ノートに書かせる。 	一斉 個人	
		④なぜ太一は瀬の主を殺さなかったのかを考えよう。		
精査・解釈	2. 瀬の主に対する太一の心情を読み取る。 3. 太一は、なぜ瀬の主を殺さなかったのかについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・父を破った瀬の主をうちたいという太一の夢について確認し、ノートに書かせる。 ・第七場面から、瀬の主と太一の様子や気持ちに分かるところに線を引かせ、ペアで確認させる。 ・父や与吉いさ、母が太一に与えた影響を振り返り、太一の心情を考えてノートに書くよう指示する。その際、できるだけ根拠を本文から探して教科書に線を引き、理由をノートに書くよう伝える。 	個人 一斉 個人 ペア 個人	・自分の考えを、本文を根拠に理由を書いている。
考えの形成	4. 班で意見や考えを交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ・班で意見や考えを発表しやすい環境を設定する。 ・考えが書けない児童へは、友だちの意見を参考にするよう声掛けをする。 	グループ	
共有	5. 全体で発表する。 6. 振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・太一を止めたのは、父や母の存在か、与吉いさの言葉か、瀬の主の存在か、自分自身の判断か、海のいのちそのものが影響しているのかも触れる。 ・太一に与えた影響が誰であれ、何であれ、結局は「海のいのち」に繋がっていることを確かめる。 ・振り返りの4つのポイントを示し、振り返りを書かせ、発表する。 	一斉 個人 一斉	

10. 板書計画

「海のいのち」

⑥なぜ太一は瀬の主を殺さなかったのかを考えよう。

太一の夢…瀬の主に会うこと。倒すこと。

この魚をとらなければ、
本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

なぜ殺さなかったのか？

ふっとほえみ……
もう一度えがおを作った。

⑤

○なぜ瀬の主を殺さなかったのか。
・海に生かしてもらっていると思ったから。
・おとうや与吉じいさ、クエもみんな海のいのちとつながっているから。
・与吉じいさのように、海のいのちを大切にし、命のつながりを考えられる漁師になることが村一番の漁師だと気付いたから。
・父と同じようにクエと戦い敗れてしまったら、母が悲しんでしまうと思ったから。

11. 研究の視点

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

自分の考えを書かせる際、根拠は教科書の本文に線を引き、理由だけをノートに書かせることで自分の考えを深める時間を確保することができていたか。また、その根拠やキーワードとなる言葉をまとめて掲示しておくことで、板書をする時間を減らし、班や全体での交流の時間にあてることができていたか。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

話し合いのルールに沿って活動を行うことで、互いの立場や意図を明確にしながら対話的な話し合い活動を行うことができていたか。

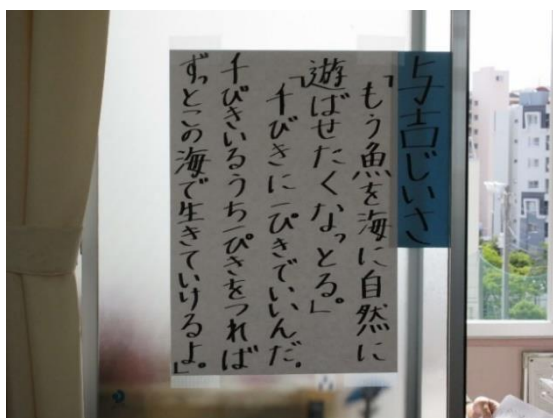
(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

振り返りの4つのポイントに沿って自らの振り返りを書くことができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

自分の意見を考えたり、考えたことを書いたりするための時間を確保するために二つの手立てを中心に取り組んだ。



一つ目は、自分の考えの根拠となる文章を教科書に線を引いてから理由を書かせるように指導したことである。そうすることで、スムーズに書き始めることができた児童が多かった。また、根拠は教科書に線を引いているため、理由だけをノートに書かせることで時間の短縮にもつながった。

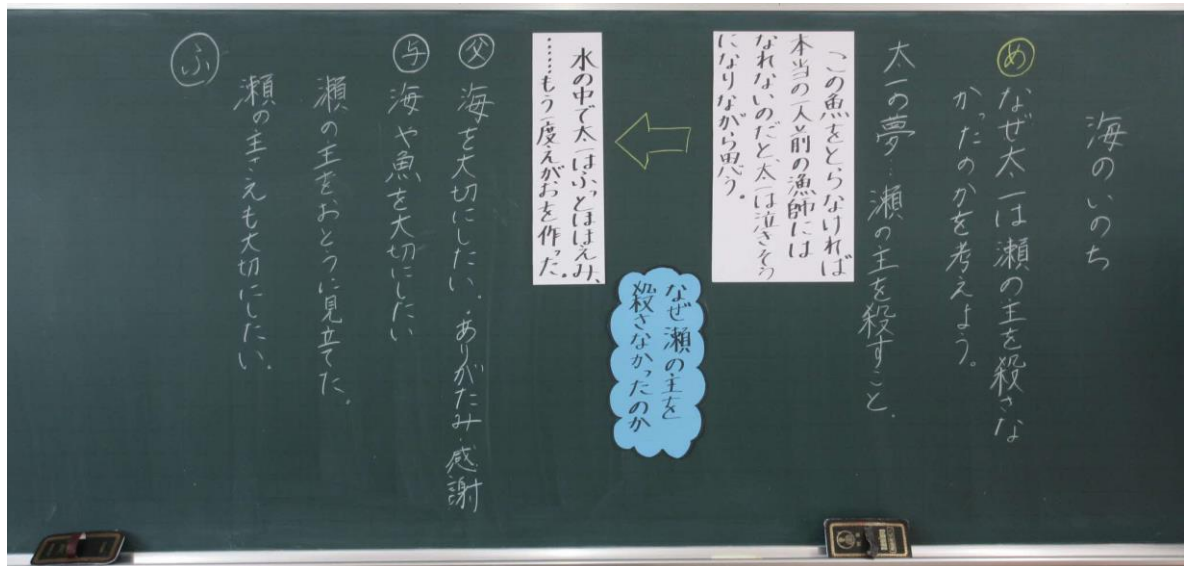
二つ目は、本時までに学習してきた内容(与吉じいさ、父、母)について、太一に影響を与えた文章を教室の壁に掲示したことである。そうすることで、すぐに登場人物の内容について振り返ったり確認したりすることができ、それらを手立てに自分の考えを深める時間を確保することができた。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

話し合いのルールを設定することで、全員が発表し、それに対して頷いたり、質問をしたりと何らかの反応を示すことができていた。また考えがまだ定まっていない児童は「考え中です。」と意思を伝えることもできていた。しかし、班の中には話し合い活動というより、伝え合いで終わっている班もあったため、班編成の工夫をする必要があった。班の話し合いの内容を全体共有するときには、班の意見をまとめて代表者が発表する形を取った。しかし意見をまとめることに関してはもう少し回数を重ねることが必要だと感じた。その一方で、代表者が言葉に詰まっているときに班で声を掛け合ったり、ノートを見せてあげたりするなどのサポートをする姿も見られ、班で話し合った内容をみんなに伝えようとする気持ちの強さを感じることもできた。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

振り返りの4つのポイントを設定しておくことで、自分自身の振り返りたい内容に合わせて振り返りを書くことができた。また、あらかじめ「振り返りをしっかり書くためには友だちの意見をきちんと聞いておかないと書けない。良い意見はメモしておこう。」と伝えておくことで、話し合い活動での聞く姿勢が良くなり、自分の考えを振り返りとしてスムーズに書けることにもつながった。また、4つ目の「今のありのままの気持ちを書こう」と設定することで、ポイントに縛られずに自分の意見や考えを自由に書けるようにも工夫した。そのため、①～③のポイントでは振り返りを書くことが難しい児童でも「感想なら書ける!」と短くても書こうとする姿が見られた。実際本時の振り返りには、友だちの名前とその児童の意見を書き、自分の意見や考えと比較してどうだったのかを書いている児童が多くおり、本時の学習についてしっかりと振り返ることができていた。



3.

成果と課題

○考えが詰まり、手が挙がる児童が少ないときにペア活動を取り入れたことで、自信につながった。

○本時までに学習してきた内容（与吉じいさ、父、母）についてまとめたものを教室の壁に掲示しておいたことで、素早く確認できたり、振り返ったりすることができた。

○個人のレベルに合わせた4つの振り返りのポイントを掲示しておくことで、スムーズに書き進める児童が増え、時間の短縮にもつながった。

●瀬の主の様子について具体的にイメージできるよう（描写や叙述）にもう深く読み取ることで、子どもたちの瀬の主への理解を深めることにもつながった。

●太一が瀬の主を殺さなかった理由を書かせる際、本文のどこに線を引けばよいかばかり考え、書き出せない児童がいたため、先に理由を書かせてから教科書に線を引かせるなどの個別の手立てを行う必要があった。

●海のいのちにつながっていることを確認させる際、なぜそこにつながっているのかをペアや班で話し合わせると、子どもたちがもう少し考えをまとめ、深めることができた。

支援学級

生活単元学習指導案

指導者 大阪市立東井高野小学校 ○○○○

○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○

1. 日時 令和5年 2月21日 2時間目(9:55~10:40)

2. 学級・学年 第2学年~第5学年 15名

(第2学年…3名 第3学年…3名 第4学年…1名 第5学年…8名)

3. 場所 4階学習ルーム、理科室、音楽室(各教室オンラインで実施)

4. 単元名 「なあにかな?」

5. 単元目標

○たて割り集団で行う活動を通して、協力することや共同学習のよさを実感することができる。(コミュニケーション)

○ルールを知り、友だちと一緒に楽しく活動することができる。

○自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えようとすることができる。(国語科)

6. 指導にあたって

(児童観)

本学級には、1年生から6年生の児童が在籍しており、学習の定着度や障がいの程度は個々で異なる。国語科の分野においても字を書くことに苦手意識を持つ児童や、説明を聞いてもすぐに理解することが難しい児童がいる。そのため、それぞれの実態に合わせて、指導者と1対1で学習したり複数の児童と一緒に学習したりしている。一緒に学習する児童の中には、一人一人学習の理解度が違う場合がある。その時は、個に応じたヒントを見たり、指導者が個別に支援したりすることで、児童それぞれに合わせた学習を行っている。そして、気心が知れた者同士で、互いに教え合いながら学習をすすめることができている。分からなかった問題ができるようになったときは、「なるほど!」「わかった!」と喜ぶ姿が見られた。また、ノートに字を書くのは抵抗があるが、ワークシートやホワイトボードになら抵抗なく書く児童もいる。学習する際、紙ではなくホワイトボードに書かせたり、「楽しそうだな。」「やってみようかな。」という意識づけになる声かけをしたりするよう指導者のちょっとした工夫や声かけが必要な児童が多い。

制作活動では、七夕やクリスマスなど、「季節に合わせた飾りの制作」を行った。七夕の飾りの制作では、たてわり班活動で学習した。上級生が下級生に優しく作り方を教えたり、下級生が上級生を頼りにしたりすることで、安心して活動に参加する姿も見られ、集団活動にも慣れてきている。また、クリスマスの作品では、一人一人が個別に飾りを作った。その際、素材をもっとたくさん使いたいという児童もいたが、素材の数が決められているため、「他の人の分のこと」を考えながら飾りを作ることができていた。その後、管理作業員さんの協力のもと、それぞれ一生懸命作った作品を集めることで、なかよし学級の1つの作品として完成することができた。たくさんの人から「かわいい!」「きれい~!」と言われ、中には照れる児童もいた。いろいろな活動の成功体験が次の学習や活動の意欲を高めることにつながっている。

コミュニケーションにおいて、授業中や休み時間、なかなか自分の思いを伝えられずに困っている児童もいる。また、思い違いや勘違いでトラブルになることもあり、必要に応じて指導者が間に入って話を聞いている。トラブルの原因や指導の様子からどの学年の児童も、友だちや指導者の話を最後までしっかりと聞こうとしたり、相手に自分の思いを分かりやすく伝えようとする経験が必要である。さらに、昨今のコロナ禍の状況により、オンライン授業も増えてきているが、まだまだオンライン授業という形式自体に慣れていない児童が多い。そのた

め、学年や発達段階に応じた形で、オンライン授業に参加するという経験を増やす必要がある。

(単元観・指導観)

本単元の「なあにかな?」は、たてわりの3つの班に分かれて別々の教室に集まり、オンラインで連想ゲームを行うという学習である。連想をする「もの」は、各教室の指導者がそれぞれ違う「もの」を提示し、その「もの」を連想させるための「3つのヒント」を話し合って考える。その後、他の班にパソコンを通して出題し合う。

1つの「もの」でも、一人一人の思いや経験や思い浮かべる事柄が違う。そのため、指定された「もの」から「ヒント」を班のみんなで考えるには、自分の思いや経験を伝え合うという言語活動が必要である。友だちとゲームを楽しむ中で話し合い活動を行い、コミュニケーション能力を向上させることがねらいである。指導要領で

特別支援学校指導要録

○自立活動

(3) 人間関係の形成 ア 他者とのかかわりの基礎に関すること

(6) コミュニケーション ウ 言語の形成と活用に関すること

○国語 A 聞くこと・話すこと

1段階 イ 身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。

(低学年)

2段階 ア 身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、

語句などから事柄を思い浮かべたりすること。 (低学年)(中学年)

3段階 イ 経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。

(中学年)(高学年)

は、以下の項目に該当する。

そのために本活動では、それぞれの班に担当の指導者を一人配置し、児童同士の話し合いが活発になるように工夫する。さらに、各班、高学年を中心として話し合いをすすめるようにする。特に第5学年については、次年度に最高学年となるという自覚を芽生えさせたい。

連想ゲームの説明を聞いただけでは、ルールが分からない児童もいることが予想される。そのため、指導者が初めに例を示すようにする。その際、「3つのヒント」は黒、答えとなる「もの」を赤で書いたものを示し、どれが「ヒント」でどれが「もの」なのか、視覚的に分かりやすくする。その後、各班「3つのヒント」を考えて、順番に問題と答えを発表していく。

問題を出題する際、「3つのヒント」を0から考えるのは難しい時は、指導者が「形」「色」「におい」等、「ヒント」を考えやすくするためのカテゴリーを提示する。その中から班で話し合って「3つのヒント」を選ばせるようにする。出題した後は、しばらく他の班がクイズの答えを話し合っている時間を設ける。その際、出題した班は、答えになるイラストを描くようにする。答えを発表する前に、イラストがパソコンの画面に映らないように注意する。

問題に答える際、「1つ目のヒントが〇〇で、2つ目のヒントが△△なので～と思いました。」など答えるようにし、どのヒントからその答えだと思ったのかという理由を明確にさせることで、自分の思いを詳しく伝えられるようにする。

パソコンの操作は各担当の先生か指定した児童が行うように徹底させ、出題している班や答える班以外の

班のパソコンの音声のミュート機能をオンにする。また、パソコンのモニターは小さいため、見えやすくするためにテレビ画面に出力させる。

7. 本時の学習

①本時の目標

- ・たてわり班で、ルールを守って活動することができる。
- ・指定された「もの」がどんなものなのかを思い浮かべることができる。
- ・自分の思いを分かりやすく伝えようとするすることができる。

②本時の展開

学習活動	○指示や支援 ★発問や発言
1. 本時の学習のめあてを確認する。	<p>学習に楽しく参加できるようにする。</p> <p>○班ごとに各教室に集合して静かに話を聞いているかどうか確認する。</p> <p>★「パソコンは担当の先生か決められた人だけが触るようにしてください。」</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> グループのみんなで もんだいを かんがえよう！ </div>	
	○学習のめあてを伝える。
2. 班で話し合っ、「もの」のヒントを考える学習を行う。	○自分の思いや考えを伝えたり答えたりして班で問題を作ることを伝える。
① 活動の内容やルールを知る。	
・連想ゲーム(なあにかな?)の例を聞く。	○画用紙を見せながら「なあにかな?」の例を提示して説明する。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 「まる」「あか」「あまい」 ⇒ 「りんご」(イラスト付き) (白の画用紙3枚) (白の画用紙1枚) </div>
②出題するためのヒントを班のみんなで考える。	
・ヒントを作るときのルールを知る。	○ヒント作りや話し合いのときのルールを伝える。
	<p>・友だちの話をしっかりと聞く。</p> <p>・みんなが楽しめるように、友だちの意見を大切にしながら話し合う。</p> <p>★「どんなヒントがよいか、班で話し合ってから考えましょう。」</p>
・班で話し合っ「3つのヒント」を考える。	○話し合いで困っている班には、各教室の指導者が助言して高学年を中心に話し合いをすすめられるようにする。
	○一人一人の意見を大切にしながら話し合いができるように助言する。

<p>③クイズを出題する。</p> <p>・答えをグループで考え、発表する練習をする。</p> <p>(出題された2班)</p> <p>・答えのイラストを描く。</p> <p>(出題した班)</p> <p>④班ごとに、考えた答えを発表する。(出題された2班)</p> <p>⑤答えを発表する。</p> <p>(出題した班)</p> <p>③～⑤を3回繰り返す。</p>	<p>○必要に応じて話型を提示する</p> <p>(○○のヒントと△△のヒントで～と思いました。)」</p> <p>○協力してイラストを描き、児童がそれぞれ活躍できるように指導する。</p>
<p>3. 本時の振り返りをする。</p>	<p>○話し合いのときのルールを守ることができたか確認させる。</p> <p>★友だちの話をしっかりと聞けましたか。</p> <p>○みんなで活動を振り返られるようにする。</p> <p>★自分や友だちのよかったところを見つけた人がいたら教えてください。</p> <p>★「ヒント」を考えるとときに難しいと感じたことはありましたか。</p> <p>★なにか感想を発表できる人はいますか。</p> <p>○今後も、自分の思いを分かりやすく伝えるためにどうすればよいか考えられるようにする。</p>

8. 本実践の考察

(1) 確かな学力を身に付けさせるための時間配分の工夫

各班一斉に問題のヒントを考えるようにすることで、話し合いの時間や発表の時間を十分に確保できた。また、指導者が問題の答えを指定することで、児童の経験を生かしてヒントを考えたり、スムーズに話し合いをしたりすることができた。さらに、問題を出した班は、他の班が答えを考える時に、答えの絵を協力して描く時間を設定することで、班でコミュニケーションをとる時間を増やすことができた。

(2) 対話的なルールづくりの工夫

授業のはじめに、話し合いのルールを説明したり、掲示物を活用して示したりすることで、ルールを意識させていつでも確認できる環境をつくることができた。また、ヒントを一人一人考えさせるのではなく、班のみんなで考えるように場を設定することで、たてわり班で協力しながら話し合いをすすめることができた。さらに、ヒントを表

したり考えにくかったりする児童への手立てとして、ヒントを絵で表すようにしたり選択肢を作って選ばしたりすることで、協力して活動することができた。

(3) 深い学びにつなげるための振り返りの工夫

授業の振り返りでは、「文字と絵をかくのを頑張りました。」「電車の絵が上手に書けて嬉しかったです。」など、児童から前向きな意見が出てきた。また、自分たちの活動を振り返り、「ヒント」がたくさんあれば「答え」が分かりやすくなったことをみんなで確認することができた。

9. 成果と課題

○みんなが活躍できるように班のメンバーを分けたり、それぞれの場面で個々に合った支援を行ったりすることで、

5年生が中心となってそれぞれの班で協力して活動することができた。

○各班1つの部屋に約5人の小集団で活動することで、話し合い活動の途中で他の班にのことを気にすることなく、

自分の班の活動に集中して取り組むことができた。

●映像をテレビ画面に映したが、ホワイトボードの文字が見にくい児童もいた。場面によっては紙に書かせたり、ペ

ンの太さや色を工夫したりするといった支援の工夫の必要があった。

●オンライン授業のツールとしてTeamsを活用したときに、背景の設定で各班の色を変えれば、どの班が指示されているのか、どの班を注目すればよいかなど分かりやすかった。

Ⅲ 研究のまとめ

1. 研究の成果

○ 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

自分の考えを説明するための根拠になる箇所や、内容を深めるために大切になる言葉にあたる部分は、教科書に線をひいたり、板書のまとめ方を工夫したりした。そのことにより、対話をする時間、考えを深める時間、振り返りをするための時間を十分に確保することができた。

○ 対話的なルールづくりの工夫

話し合いのめあてを明確にするために、話型を活用したり、話す順番を決めたりするなど、各学年の実態に応じたルールを工夫した。そのため、班の児童全員が話し合いに参加でき対話が活発になった。

○ 深い学びにつなげるための工夫

振り返りのめあてを明確にした。そのため、その時間に気づいたことや自分の考えをもとに振り返りを書くことができた。また、振り返った内容を対話に活用し、深い学びにつなげることもできた。

2. 今後の課題

● 確かな学力を身につけさせるための時間配分の工夫

児童の意見やその根拠をなど、児童の発表したことを黒板に完結にまとめる工夫が必要になる。そのことにより、他の児童が考えたことをヒントにさら自分の考えを深めるための時間の確保につながると考える。

● 対話的なルールづくりの工夫

相手の意見を聞いている場合でも、すぐに自分の意見を話してしまいたくなる児童がいる。最後まで相手の話を聞くことの大切さを徹底することに対する継続的な指導が必要である。学年の発達段階に応じて、系統立てた対話の目的を作る必要がある。

● 深い学びにつなげるための工夫

“振り返り”と“学習のまとめ”が区別されていないことがあった。指導計画の段階で指導者は“振り返り”により、児童が学習できたことや自分の考えをしっかりと持てるように、“どういう振り返りにするのか”を明確に持つ必要がある。また、その“振り返り”の積み重ねが、児童の自己肯定感につながるように取り組む必要がある。

おわりに

本校は令和2年度まで算数科の研究を中心に取り組んだ結果、成果として「東井高野スタイル」ともいえる授業スタイルを確立することができました。

そして、昨年度より研究教科を国語科に設定し、昨年度は本校児童の課題である「書く力」を育成するための前段階として、説明的な文章を通して「読み取る力」の育成に取り組みました。また研究主題を「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる」と掲げ、アクティブラーニングの観点における「主体的・対話的な学び」に焦点をあて、取り組みました。

今年度は、昨年度に引き続き、研究教科を国語科とし、本校児童の課題である「書く力」の育成をめざし、昨年度の取り組みより生じた課題である「学習活動に対する時間配分の工夫」、「対話的なルールづくりの工夫」、「深い学びにつなげる振り返りの工夫」を研究の視点の柱とし、対話的な学びから深い学びにつなげる研究に取り組んでまいりました。その結果、まずは、指導者と児童、さらに児童同士の対話の活性化が生まれました。次に、その学習内容をしっかり振り返り、積み重ねていくことで、深い学びから確かな学力の定着へと歩を進めることができました。また、校内においても、研究を通して、若手、中堅以上の教職員はもとより、経験年数に関係なく活発な会話が生まれました。そして、研究部を中心に、全教職員が共に協力し、励ましたり助言したりするなかで、一丸となって主題に向かって邁進することができました。学習を通して、児童も教職員も、主体的・対話的で深い学びを進めることができたのが、今年度の研究の大きな成果だと感じます。

次年度におきましても、今年度の成果と課題を活用し、国語科における「東井高野スタイル」が確立できるよう、さらに研究を深め、教職員一丸となって取り組みを進めてまいります。

最後になりましたが、大阪市教育センター学力向上推進指導員の高砂和滋先生には年間を通して、専門的な見地からご指導いただきまことにありがとうございました。今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

教頭 橋本 功士